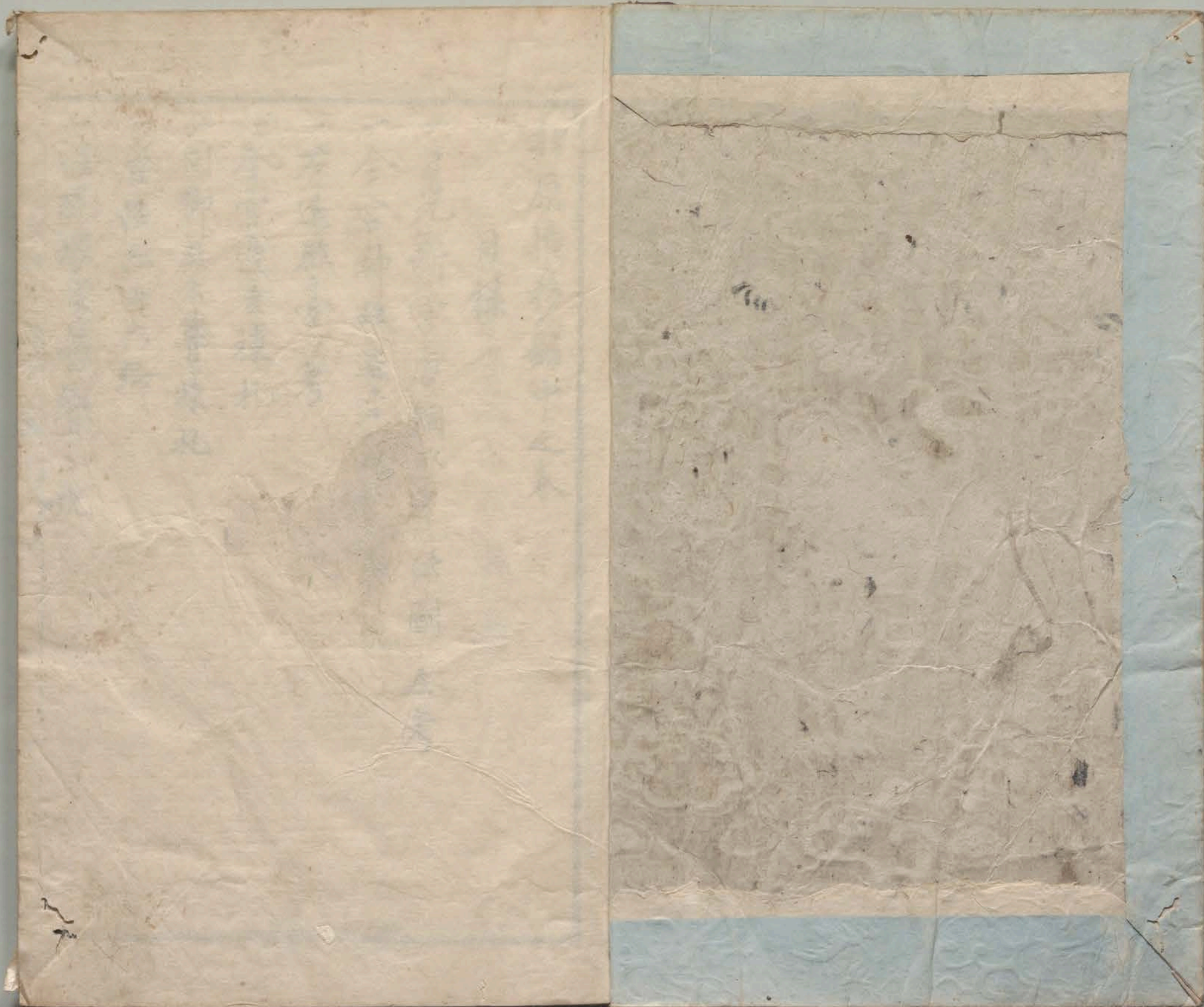
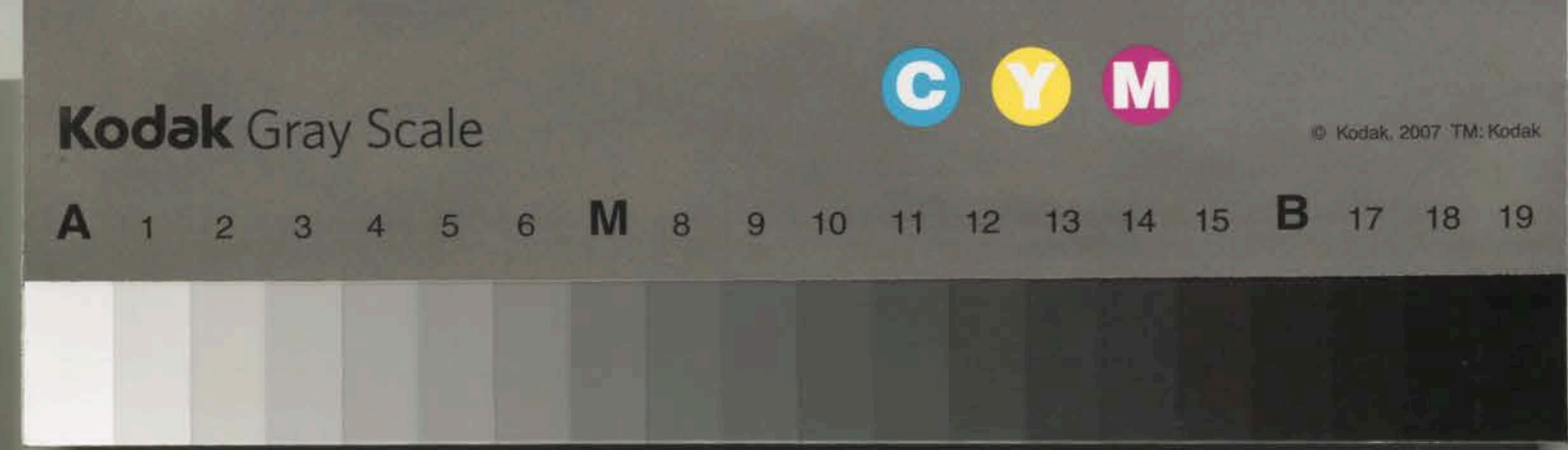


142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2

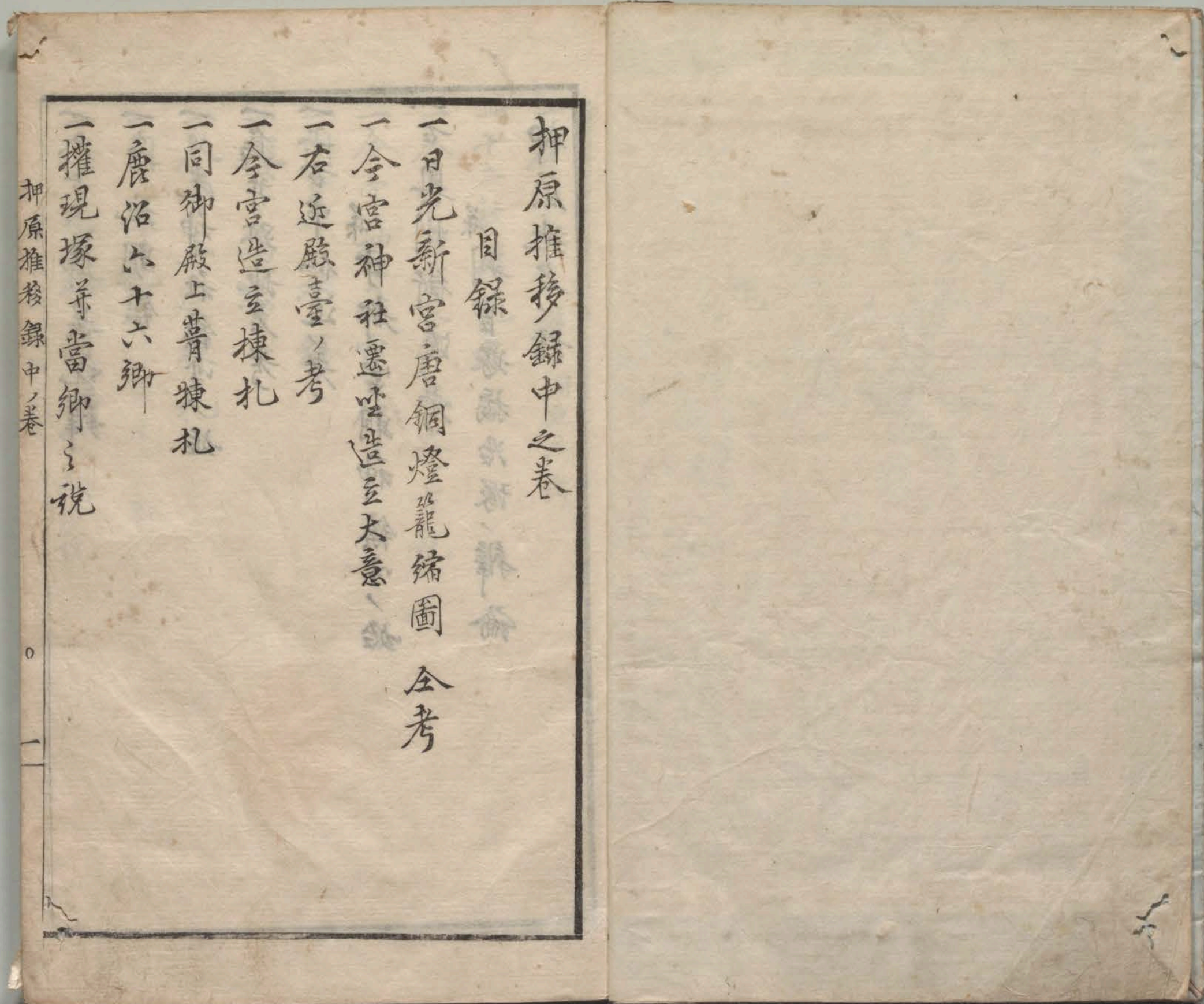
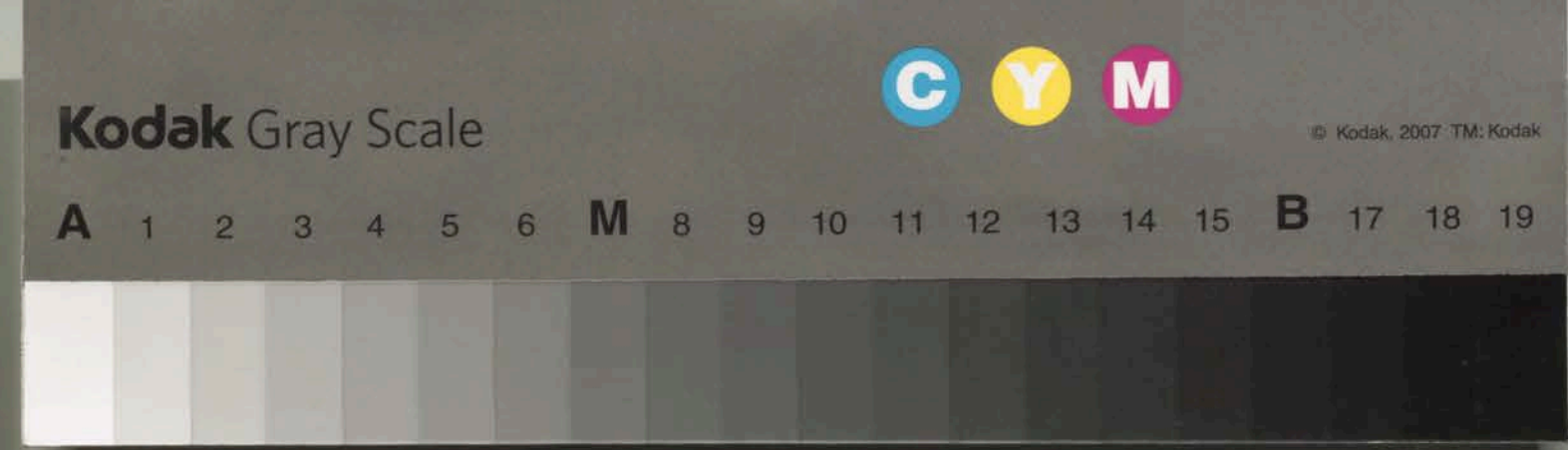




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





押原推移録中之巻

目録

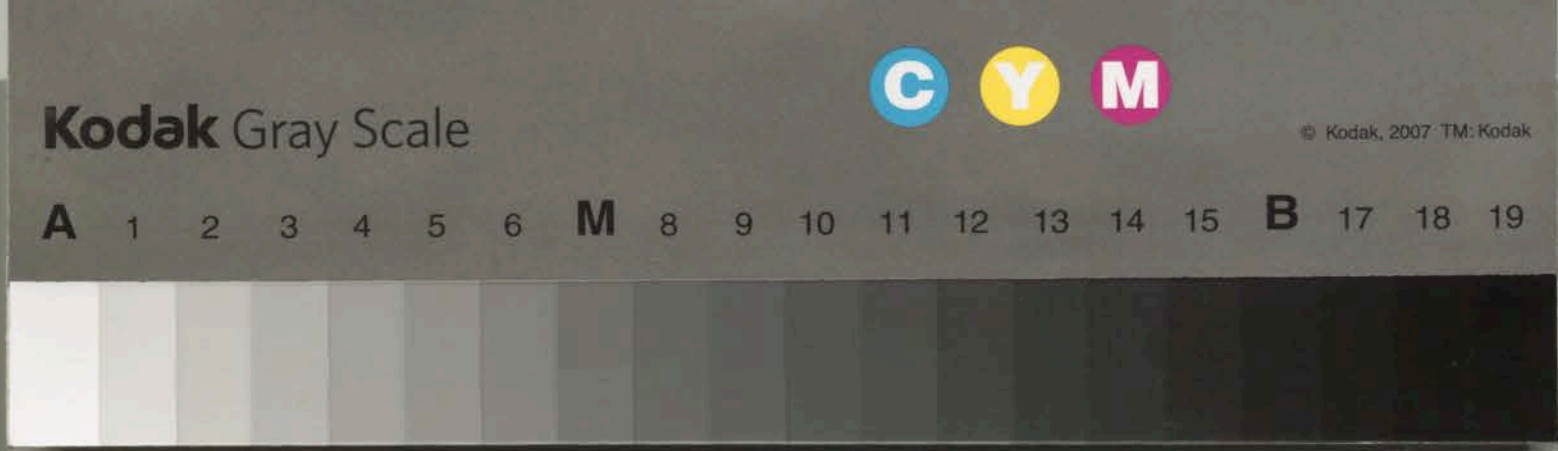
- 一 日光新宮唐銅燈籠縮圖 全考
- 一 今宮神社遷坐造立大意
- 一 右近殿臺ノ考
- 一 今宮造立棟札
- 一 同御殿上葺棟札
- 一 唐沼六十六郷
- 一 權現塚并當郷之説

押原推移録中之巻

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





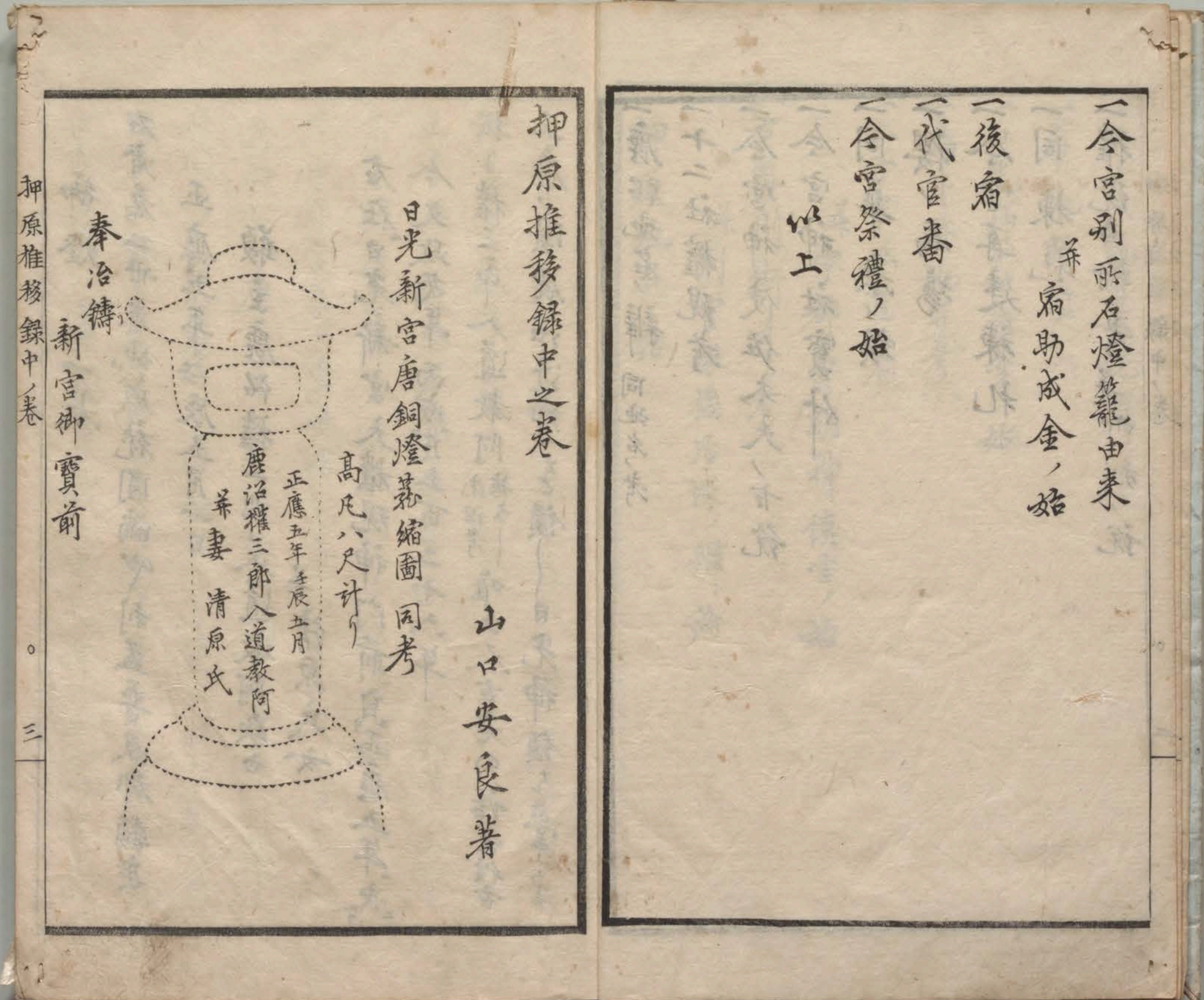
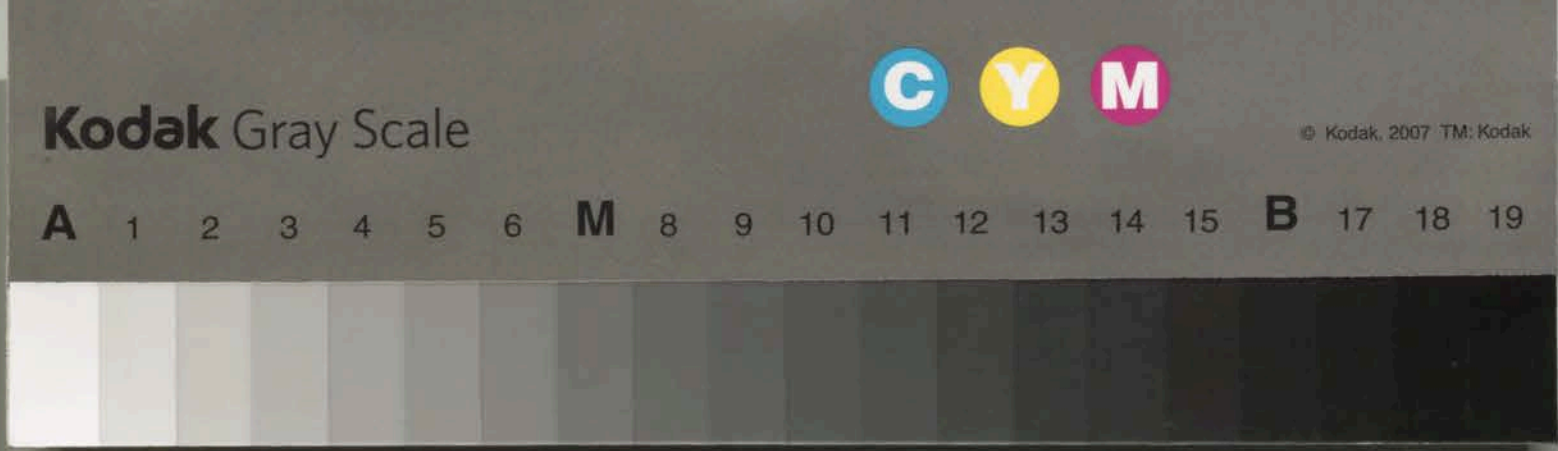
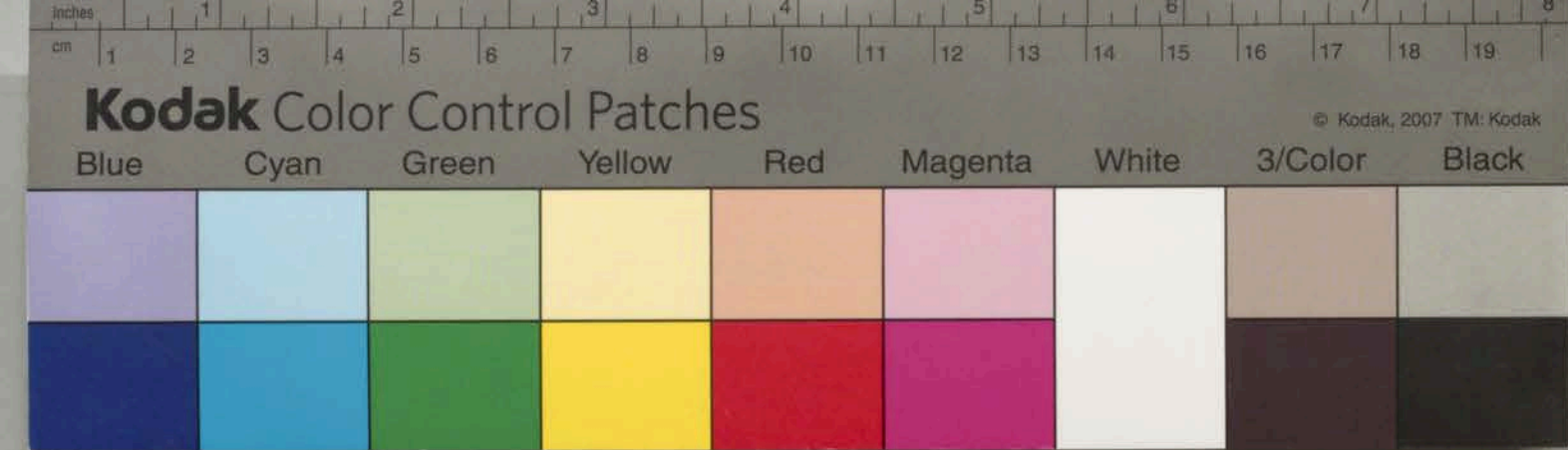
一六十六御異説辨  
 一争地明鑑  
 一日光神社鎮坐ノ始  
 一鳥井跡地名考  
 一上古中仙道ノ考  
 一宇都宮明神鎮坐ノ始  
 一古奥州街道ノ考  
 一判官塚橋治塚ノ辨論  
 一押原地名ノ話  
 一鹿沼地名ノ辨 同地名ノ考  
 一十二社權現考  
 一今宮神使佐太夫ノ古説  
 一今宮神社實什  
 一同華表ノ類  
 一櫻ノ馬場  
 一今宮再建棟札  
 一同棟札  
 一權現曲輪ノ考 并町刺ノ説

押原権現録中ノ卷

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





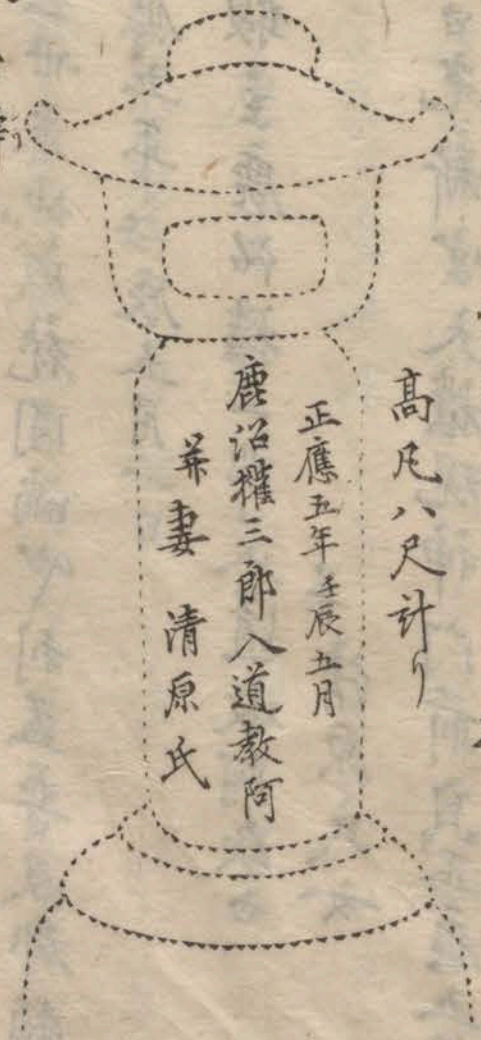
押原推移録中之卷

日光新宮唐銅燈蒔縮圖 同考

山口安良著

奉治鑄

新宮御寶前



高凡八尺計

正應五年壬辰五月

鹿沼權三郎入道教阿

兼妻 清原氏

押原推移録中ノ卷

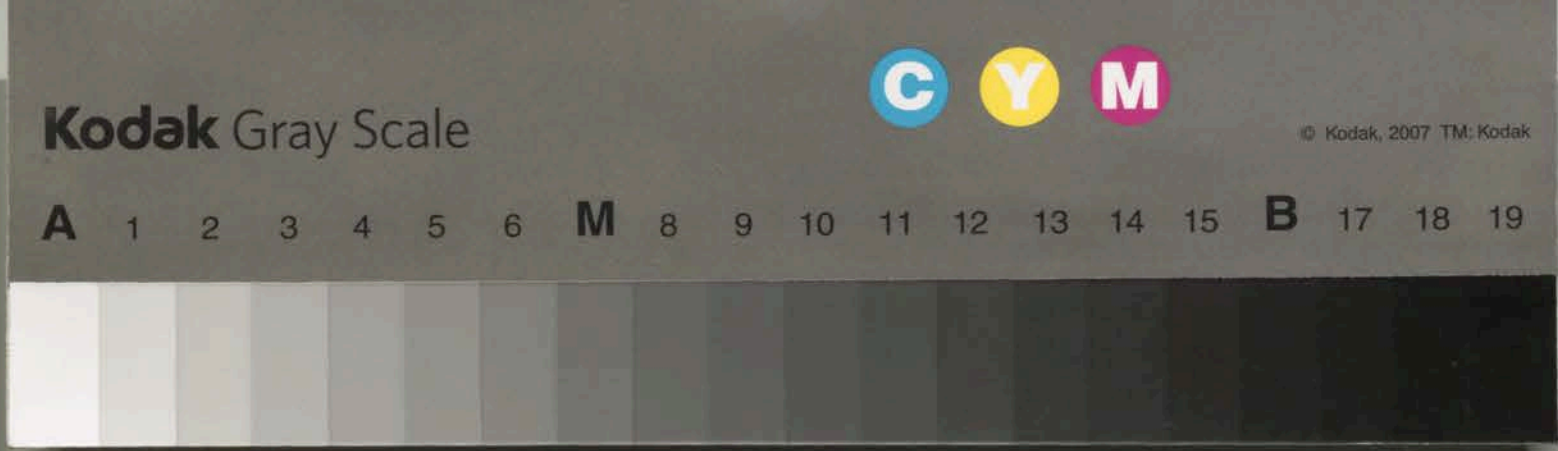
三

一今宮別所石燈籠由来  
一併 宿助成金ノ始  
一後宿  
一代官番  
一今宮祭禮ノ始  
以上

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





御燈 一基  
 右者為二世悉地成就圓滿や利益普及郡類矣  
 正應五年壬辰五月一日  
 頼主鹿沼權三郎入道教阿教白  
 并清原氏女  
 右在日光新宮大權現神門前自正應五年去  
 今文政九年丙戌凡五百三十六年  
 按子權三郎入道教阿先祖考唯去又古老の語云往古  
 正應頃鹿沼近郷を領し日光神領を掌り  
 支配しありし人ありし故に 神徳を仰きて  
 燈籠を獻せしなりしと  
 正中録云延徳年間鹿沼右衛門太夫教清といふ  
 女を則權三郎入道教阿の子孫より頼猛威を震  
 了宇都宮家と累世隙を争ひありと云々  
 再按に正應年中皇延徳の間凡二百年に近  
 此間の系統法書を抄録すより更に按を知らず  
 唯正中録より事始いやくかえりて身とも系統を録  
 せし思ふに軍國争戦の中に居し二百年間

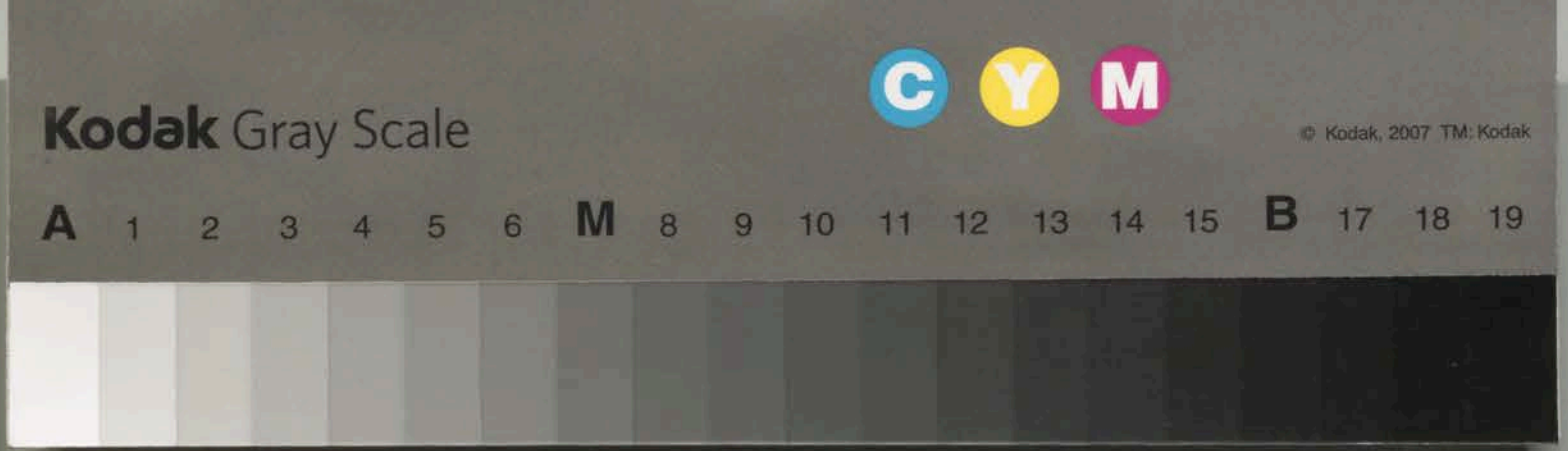
押原推移録中ノ巻

四

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





家系絶せし名なき宇都宮に敵し累世地を争  
 ろし久しとて之を名に願權ありし事推  
 了知しゆし博文強記しし諸家の世系を穿  
 鑿さしつしとて之を翼子小好古の癖あり井上  
 信好子も考證すしきものせしとてゆれ也  
 正中録云宇都宮十八代忠綱後從四位下  
任下野守小山下野守  
 高朝を討んとしつるの心何ぞぞの唐沼を滅し  
 加蔭城主將源遠  
右工門尉南摩城主將南摩  
舍人介を降し勢に乗  
 しし皆川櫻木共子麾下とありし小山の羽翼を  
 去りし後小山結城を亡せんと企し唐沼を攻  
 ん可為に多氣山に城を築き出張しし尊祿  
 三年癸十月廿八日按に一女子八延徳三年とあり共小徳母り  
安永三年あり由次子あり詳は千  
 五百余騎を率しし出陣す右瀬川教清是を聞  
 了七百余騎伐卒し黒川を渡り上野の臺に陣  
 以忠綱多氣城より出戦しし血戦に教清戦破  
 きて討死し唐沼の領地忠綱の有とあり教清  
 子あり唐沼の統多子絶也以上摘要

按の上巻に録せし土人の口碑 那須記の趣ありハ

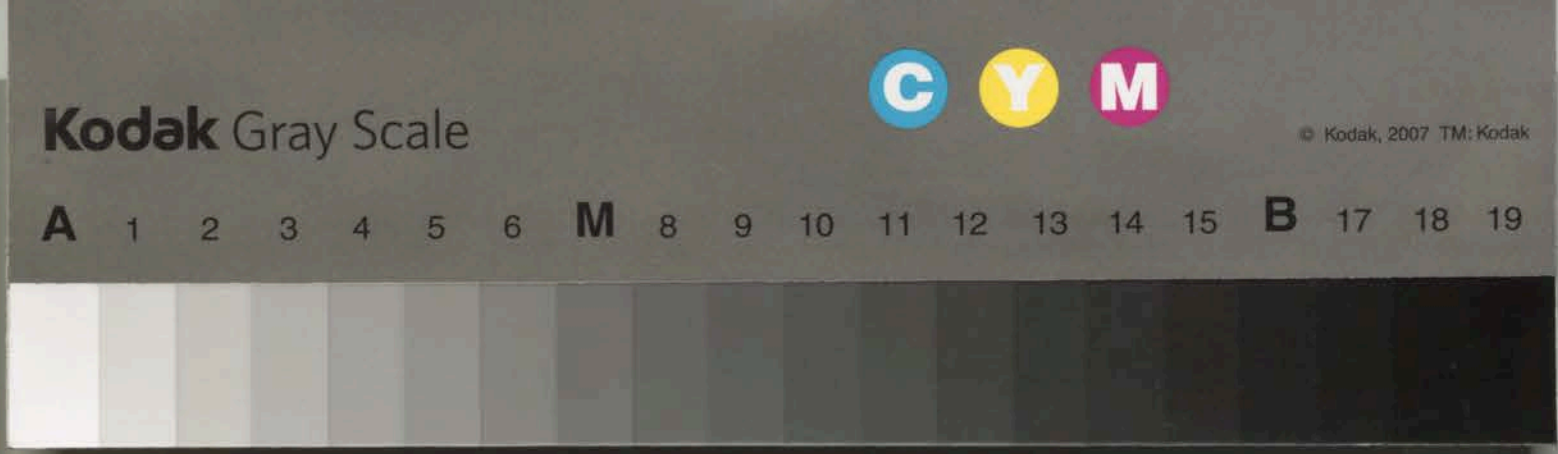
押原推移録中ノ巻

五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





家系統せの名云々宇都宮に敵し累世地を争  
 あり久しと之を争ふ頗權勢あり一車推  
 了知る所一博文強記より諸家の世系を穿  
 鑿さすしと之を文翼子も好古の癖あり井上  
 信好子も考證すきものせしと云われ此  
 正中録云宇都宮十八代忠綱後從四位下  
任下野守小山下野守  
 高朝を討んとすとの心ありと云ふ鹿沼を滅し  
 加蘭城主將渡邊  
右工門尉南摩城主將南摩  
舍人を降し勢に乗  
 して皆川榎本共子麾下とありて小山の羽翼を  
 去りて後小山結城をとり云々んと云々鹿沼を攻  
 ん可為に多氣山に城を築き出張とて一尊祿  
 三年癸十月廿八日据に一云十八延祐三年とあり共不詳也  
變大永三年あり子由次子あり千  
 五百余騎を率しして出陣す右瀬川教清是を聞  
 了七百余騎を率しして黒川を渡り上野の臺に陣  
 以忠綱多氣城より出戦しして血戦に教清戦破  
 まり討死し鹿沼の領地忠綱の首とあり教清  
 子あり鹿沼の統多子絶也以上摘要

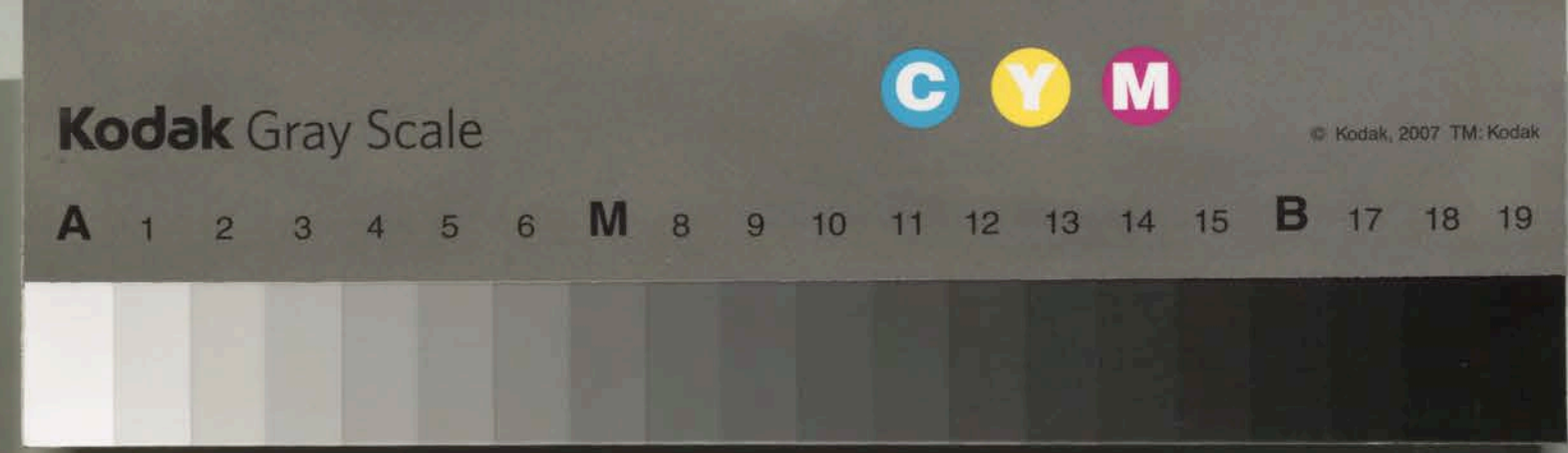
押原推移録中ノ卷  
 五  
 按の上卷に録せし主人の口碑那須記の趣ありハ

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2







是を記す傳々浮説を其傳子記せり之  
 今宮神社遷坐造立大意  
 元和六年苗書云 正中原子出た起と大同少資りりも實化とす 宇都宮忠綱鹿  
 沼教清を滅し之を日光神領進し犯し  
 掠めて恣に堺の定抗を建替す其の領地  
 とあり乱妨狼藉つたなり其極威  
 けり思ふに加蘭南摩の兩味共小午を東收  
 て降人となりし可此勢も棄し鹿沼  
 を根城とし皆川を攻めしと延徳三年

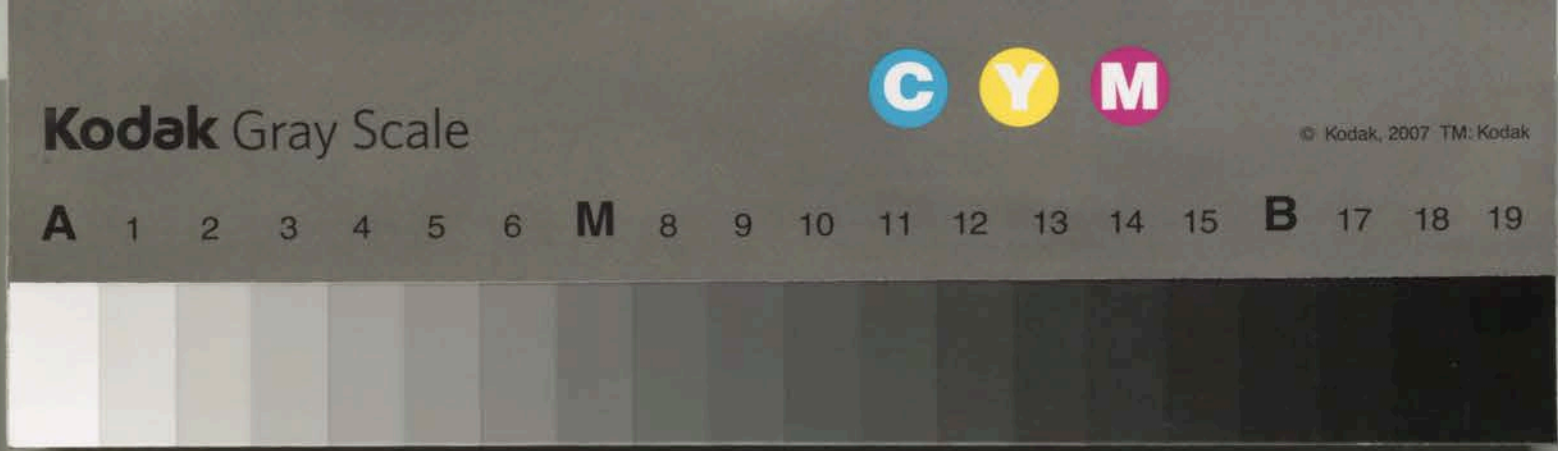
十一月 大永三年の誤り之次子喬しと辨 軍を出し粉尾栗野の城  
 を抜き久野深程を畧し真名子大垣を  
 降し破休の勢に乘し皆川を攻めん  
 と皆川宮内少輔宗成謀を巡らし  
 小山下野守高朝に調し合せ密に小山壬生家  
 を誘ひ及びて壬生家ハ壬生邊を塞ぎ小  
 山壬生ハ大軍を催し不意に鹿沼押し  
 せ宇都宮の番兵を退散し宇都宮勢の糧  
 道を断根本大隅ハ南を塞ぎ是を討ん

押原推移録中巻  
 六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





斯年配をふし皆川宗成川原田  
 出陣して宇都宮勢と對陣此戰也  
川原田合戦場の邊押して戦地あり 忠綱皆川  
 と川原田より大いに戦ひ皆川宗成深入して  
 戦死世に傳ふ川原田合戦是之 然るに皆川可謀の如く小山  
 壬生に結城政勝の加勢木加りて鹿沼を宗取  
 至黒川筋を巖イハに守りて又下至大芦川  
 通りを差塞き加蘭南摩を攻んとすに  
 西城は忠綱の勢より思ひて降りてあは  
 忽及び忠綱小山は屬は爰に於て忠綱  
 の陣中大小周章は斯く慶は小山勢西方  
 侍を駈僅し忠綱の陣に夜討は皆川  
 壬生杉木軍兵を合し俱に攻討つ宇都  
 宮勢大に狼狽し兵士數多討死し惣  
 敗軍と成りて漸に忠綱席口越道連川  
 田村より松坂越とつる所を經て宇都宮  
 に歸陣は小山高胡思ひの外に皆川家の謀  
 を以て鹿沼領手に屬しけさ其切を嘗し

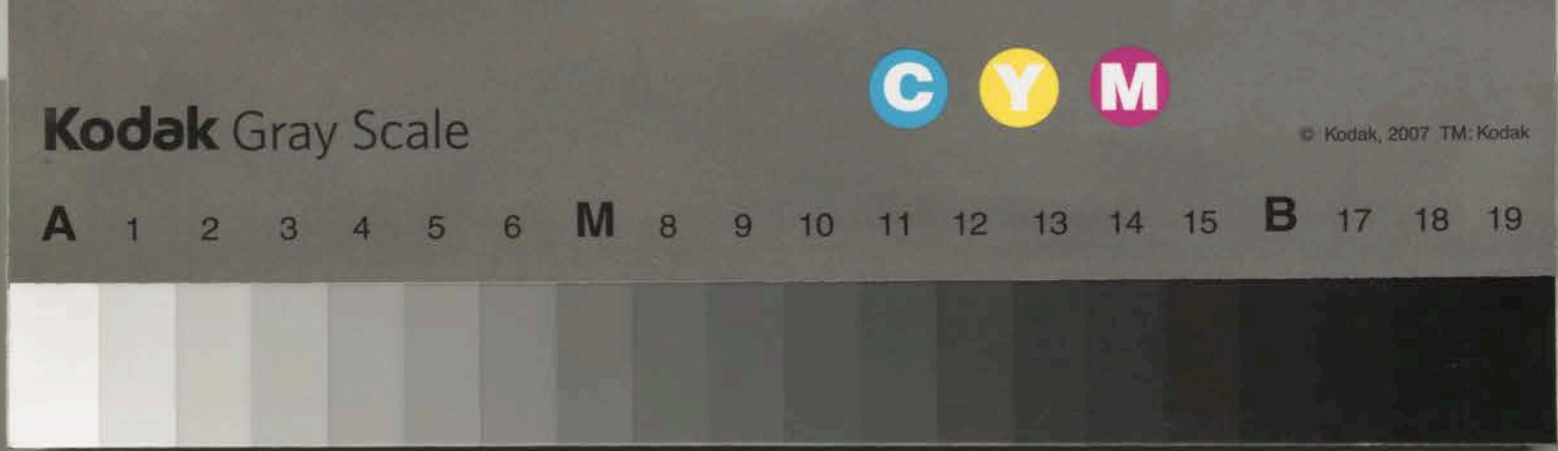
押原推移録中ノ卷

七

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





皆川宗成の男山城守成勝に皆川家城  
 附の村三十ヶ村を送り又壬生家の所領  
 を鹿沼に送り替へ是迄の壬生領を小山領  
 と改爰に於て壬生意安鹿沼を領して天文  
 元年鹿沼城を築き大永三年教法  
 廿死より十ヶ年見同三年日光三  
 社を城の鎮主として所所の森に鎮坐あり  
 今宮の祠を曲輪の内に移し奉りて重く祭  
 日先惣政所の棟札を納めしとの之棟札  
 今  
社あり  
 次に移宮

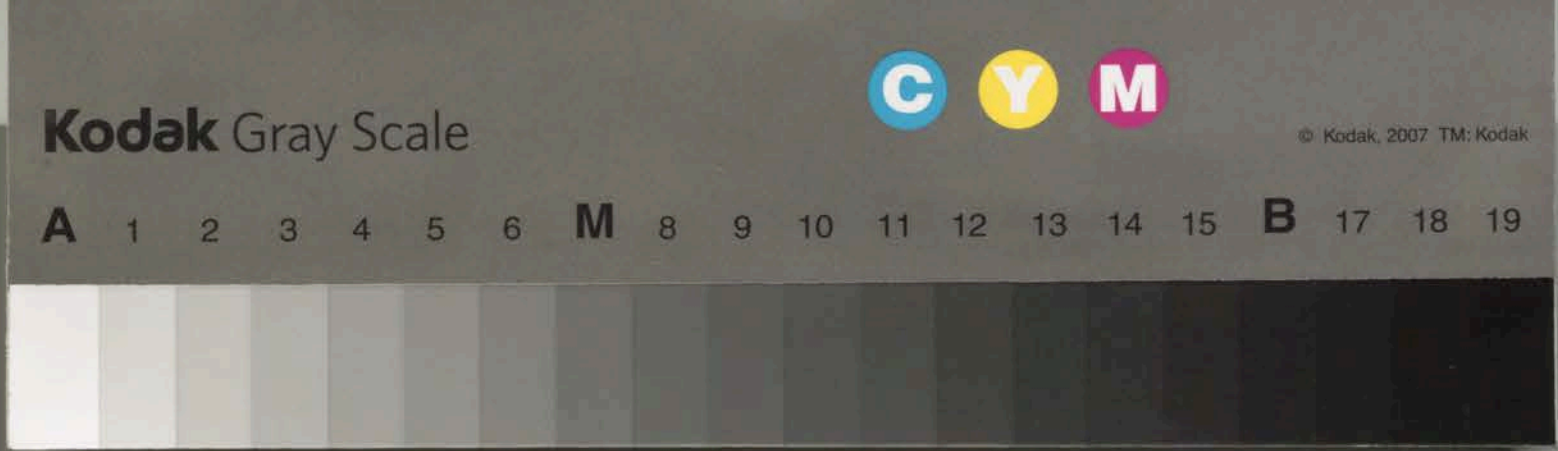
按小惣て往古の事跡を後世より記せん  
 とすに彼是の軍記亦戦ひ考合さる  
 にかきと是と八年号ホ矛盾して合さる  
 ハ稀なるもの之ハ軍記の作者唯世小語り  
 傳へる爰此端をのこ按として可意  
 乃引方に記し又ハ僅なる事戦取執  
 して面白く事ありけに綴り  
 又ハ傳寫の誤りある哉考索せんと  
 一方よりして説を考甚し記よ至りてハ

押原推移録中、卷

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





年号を撰りに改めて誠らしくも取合  
 するの状後々何事之是不脱家の常  
 事しき事實を誤るの少なきを以て  
 其又又をえり人も耳を信し目成  
 悦ぶ乃掌故の世に多けきハ文華  
 のみ意門きて其虚實を能く記さ  
 ず何々の書に示し何事杯數百年  
 乃事をおき眼のあきるもやめ  
 ず志より教り物つじ年ふ人あり  
 得

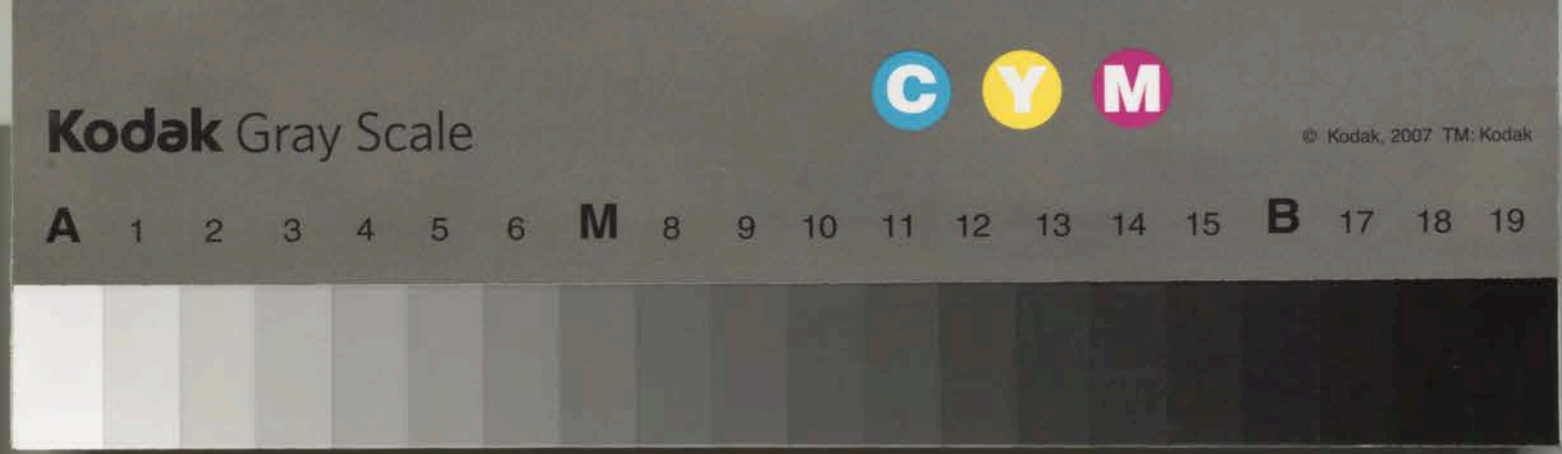
考る時ハ  
 ○宇都宮系圖云第十八代下野守從四位下  
 忠綱大永七丁亥年七月十六日卒歳三十  
 七とあり忠綱死去大永七年より享祿

押原推後録中、卷  
 九

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





三年ハ三年後之大永八年改元あり事知る享禄と成り了  
 今是を按に教清討死後同年忠綱兵を  
 進めて皆川宗成と戦ふ此時宗成戦死  
 ○皆川系圖云皆川宮内少輔宗成父皆川  
孫四郎氏  
秀姫君  
皆川大永三年癸未十二月廿七日宇都  
 宮忠綱子於川原田合戦討死  
 是を以て推考する時大永三年なり終  
 之

又一書ハ皆川宗成討死を延徳二年辛未  
 十月三日と云ふ是又大誤なり宇都宮忠  
 綱大永七年歳二十七日卒忠綱の應  
 七年乃出生也延徳ハ明應より二年前  
 の年号之延徳二年より終王  
 明應と改元次忠綱ハ忠綱未生以  
 前之事知る事を知る

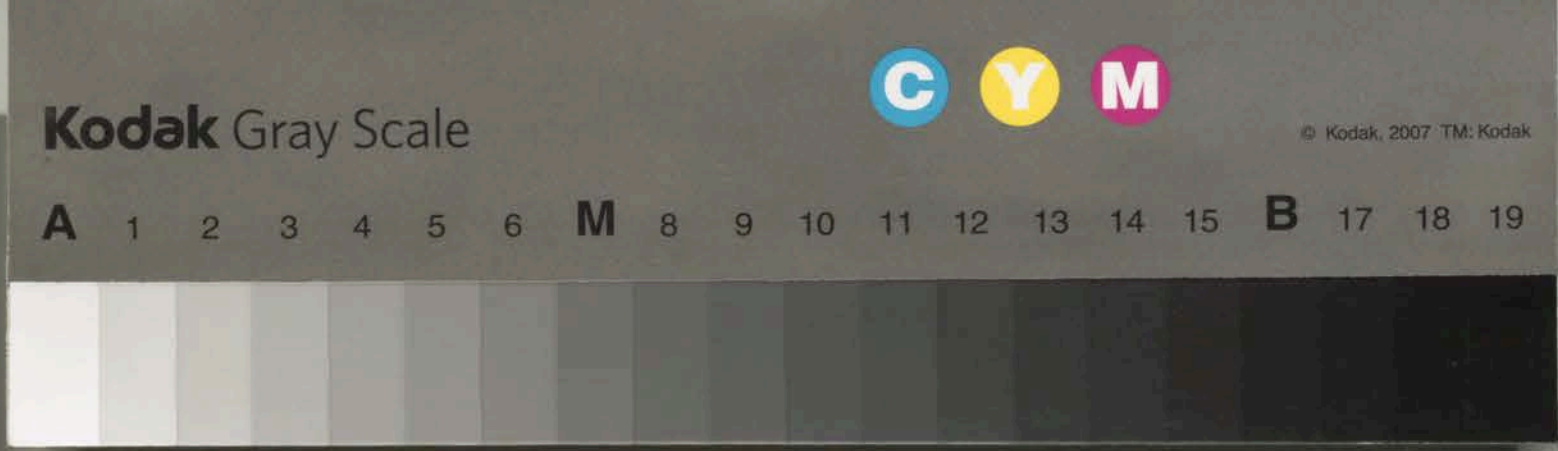
又按に古戦録云大永三年十月總州結  
 城乃城主左衛門督政勝といふ父ハ政朝入道  
 孝顯母ハ宇都宮成綱の女之也宇都宮

押原推移録中ノ卷  
 十一

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





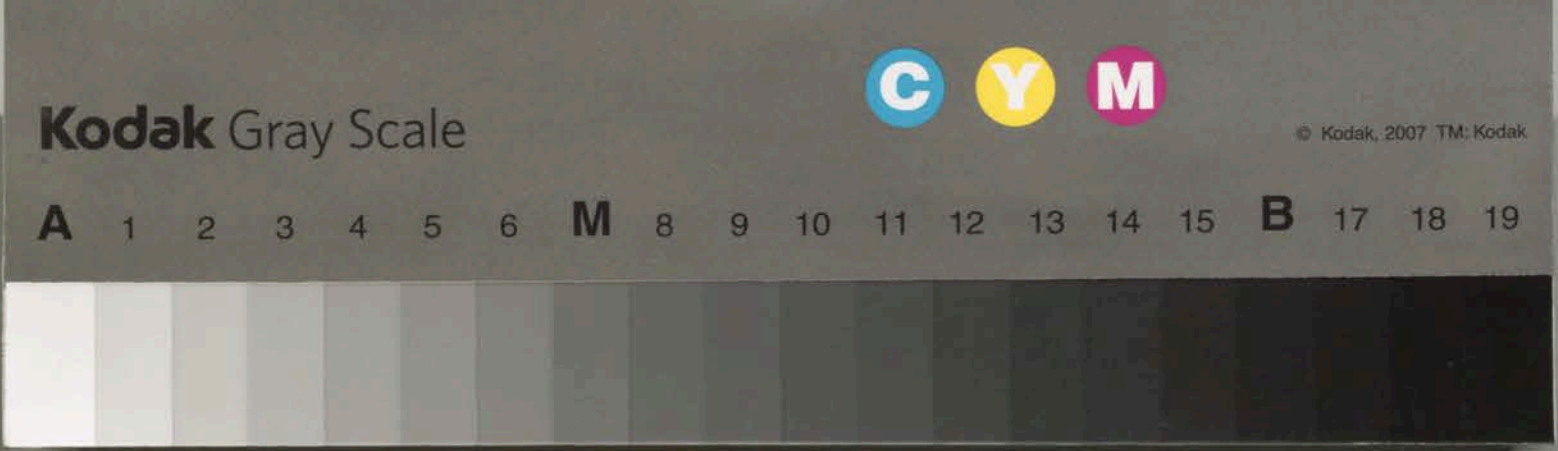
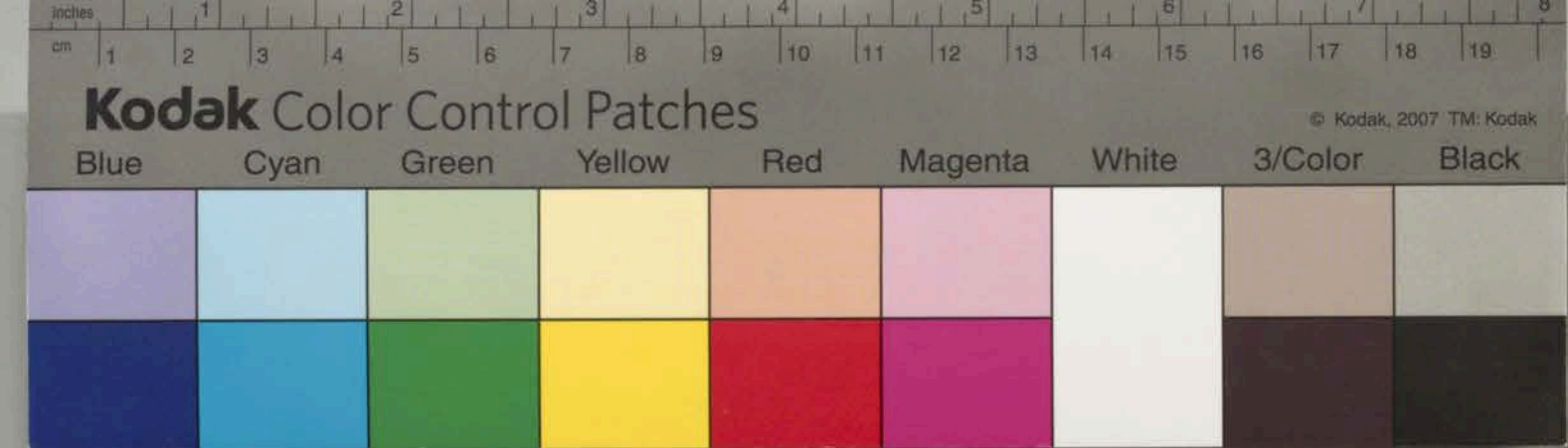
赤三郎忠綱ハ政朝の妹婿たり忠綱生得  
 不義無道よりして結城を亡さんと企を  
 かく政朝是を聞て兵隊率して宇都  
 宮乃領地に乱入を忠綱手勢を率して  
 半途に向ひ猿山に於て一戦ハ忠綱戦  
 敗して居城に入事終つて鹿沼乃古城  
 へ退去して是を避く云し山上摘要  
 按る古戦録とて書三十卷年号人  
 名等錯乱や所ありて悉くハ信用す  
 へりしと雖も又取るべき事少あ  
 此一條も月日ハさう不審ありと雖も  
 大綱ハ違ふへり忠綱教清を滅し  
 勢に委りて結城をも平に入んとせし  
 事とてさきと結城との一戦ハ打負と  
 事とは結城政勝の弟とて小山高朝を  
 討んとしてつふ山の一族とて皆川を  
 討んとして川原田にて接戦せし事  
 一々此時小山壬生結城等心を合せし

押原推移録中ノ巻

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





忠綱の後を襲い、此忠綱の不義を惡  
とすの事あり

結城系圖  
政朝 天文十四年七月十三日卒、六十九才  
延享八、大永三年、八十二才、當ル  
政勝 政朝の子、永禄二年卒、五十六才  
延享八、大永三年、八十二才、當ル

小山系圖  
高朝 結城政勝、天正四年十二月晦日卒、  
六十九才  
延享八、大永三年、八十八才、當ル

是等の諸記録に合し、考るに、何月、何年  
月、何日、何所、何人の考定する處、誣し  
と、ハ、イ、ウ、エ、オ、カ、キ、ク、ケ、コ、

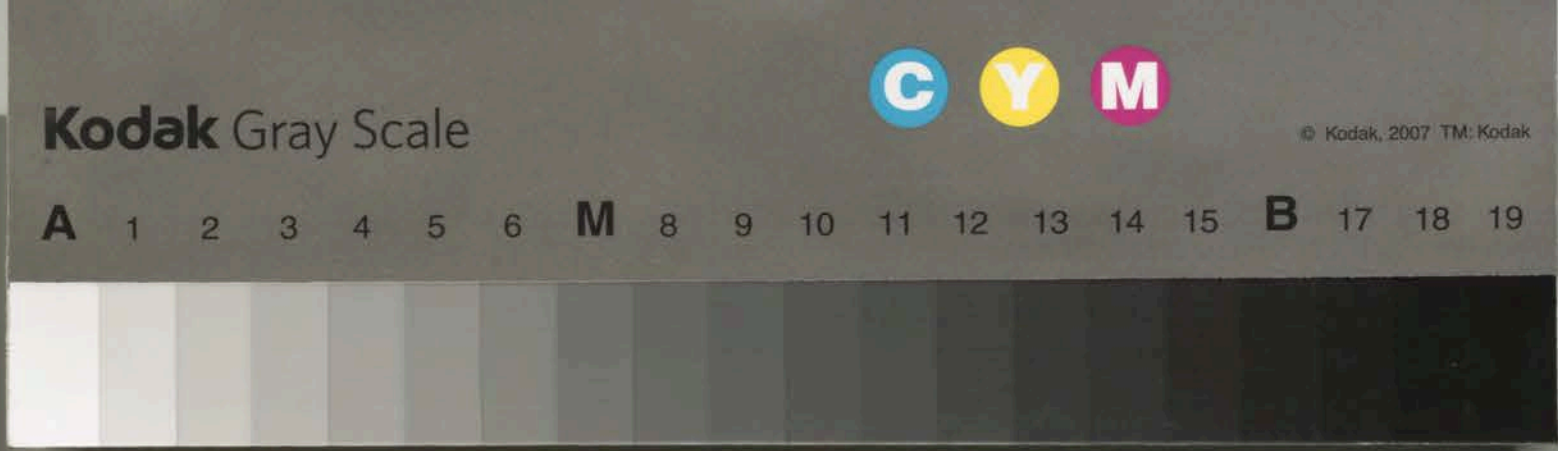
斯くも、本文の如く、壬生、家、鹿沼を、  
城を築き、今宮の神を、崇め、  
右近殿、臺ノ考  
愚按に、筑後守、意安、鹿沼城を、築くと  
あり、新々に、築き、もの、元、来、教清の、居  
城あり、を、郭を、増し、堀を、深くな  
し、て、移り、し、その、後、今に、於て、知、す、一  
ら、思ふ、よ、教清、も、權三郎、入道、の、皇子、孫

押原推移録中ノ卷  
十二

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





相續して二百余年の舊家より宇都  
 宮と志はく争戦ありし事ありて  
 臣良従ふ数多ありし一豈居城なく  
 して然らんや終るに言安の鹿沼に城  
 を築くとあるを以て名を正しハ正しく新  
 に城を築ける之終るし今西鹿沼地  
 先太寺の南愛宕山の麓に東西八十間  
 余南山百間余よりして全く古城跡と  
 つかへき所あり去俗呼て右近殿臺と云ふ教清討死あり

今を去る事二百年に近し唯往古の城  
 跡との三口碑は幾里或ハ里やの説ハ  
 壬生家乃老臣右近とつくる人の居せし  
 所ともいふと云ふと壬生家に右近とつ  
 くる臣ありし事諸書に名なき事ハ是又  
 杜撰乃説ありし今試に強くいり  
 右近の臺ハ右工門ウケモの基の唱語りより  
 則教清乃城跡なりし前録也  
 宇都宮志綱結城勢に戦負て鹿沼

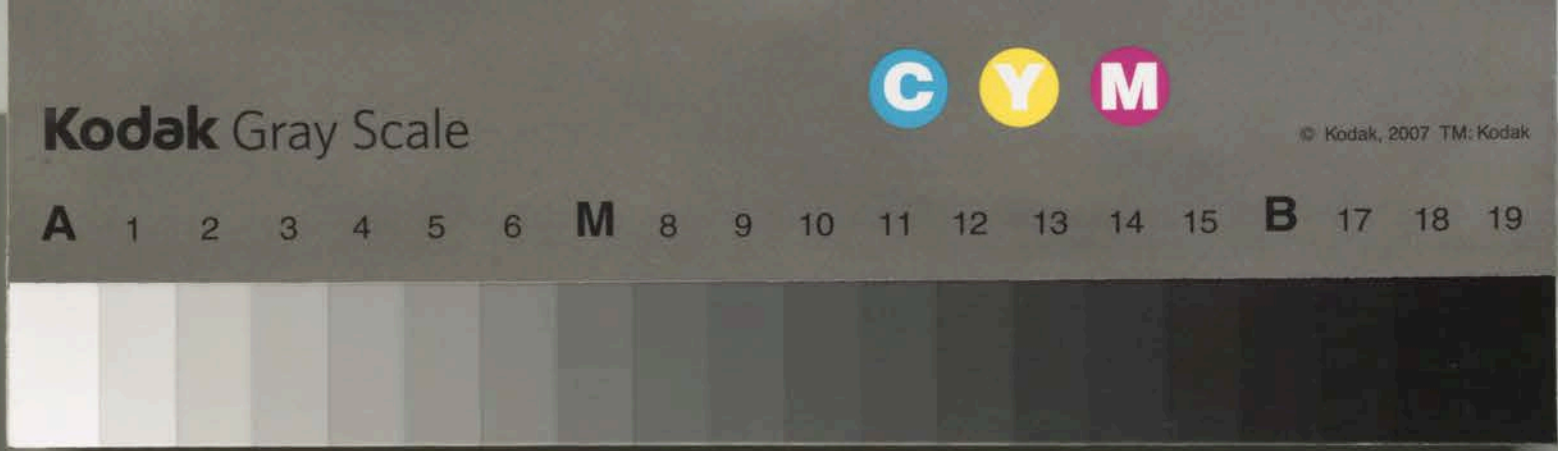
押原雅移録中ノ巻  
 十三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2







乃古城に通るといふ則往昔も至鹿沼  
 家此古城ありて爰をさしていふあり  
 へ右近右衛門文字も終ま安し又  
 唱ひも少し通ふやうありさき巻首  
 に因せり坂田山の古墟ハ至生意安の新  
 子縄張して築きしありり程  
 ○再按に坂田山の古跡跡に岩上左京殿曲  
 輪と号せり此あり俗呼てケガリ是ハ至生家  
 と号き人あり又本丸の後にたゞ殿曲輪と  
 号する此あり是も又至生家に聞ざり  
 人々依りて考まハ太夫殿曲輪ハ則右衛門  
 太夫教清の居せり此をいふハ非ざり  
 歎きまると又岩上左京といつる人鹿沼家の  
 老臣乃内にありしと云はれも聞は斯  
 あまき言安ハ教清の古城を修理して  
 居城とせしといふ事ありし事歎ま  
 難し後人は是を正し之

今宮造立棟札

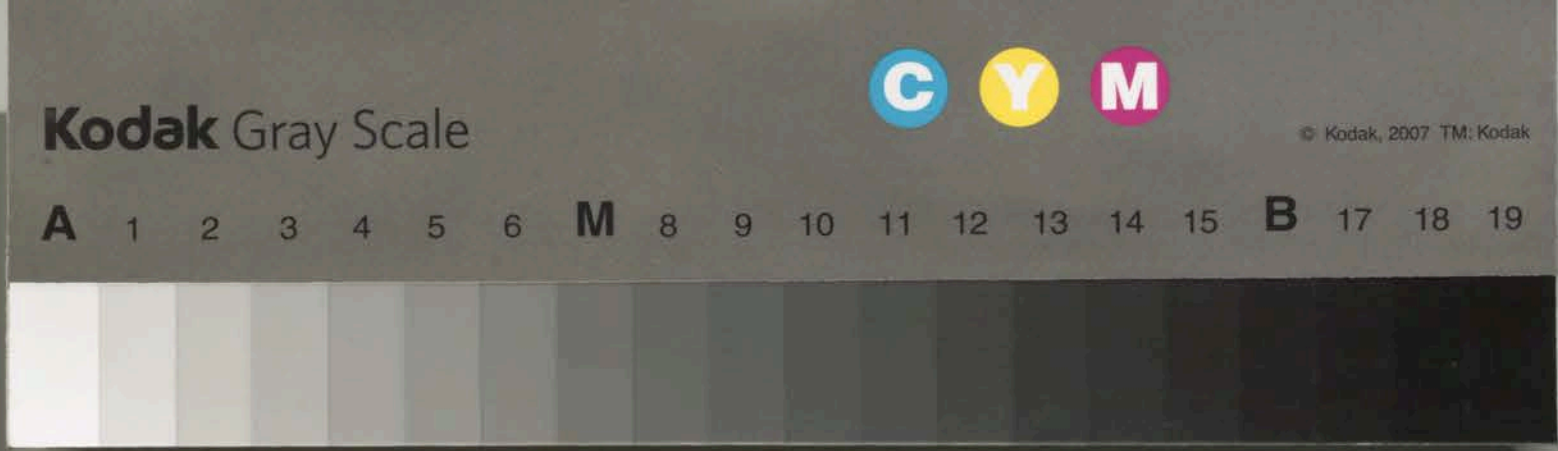
押原推後録中ノ巻

十四

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





天文龍集 甲午三年  
 奉行 木屋奉行 黒川刑部 惣房朝  
 大貫内匠助昌秀  
 熊倉内匠助吉久  
 高野淡路守重吉  
 同修理亮 房吉  
 澁江縫殿助房宗  
 長次郎右衛門房光  
 技 左 助 政 吉  
 山野山城守昌家  
 鍛冶奉行  
 奉行 諸行事戒師 觀世音菩薩  
 證誠大梵天王  
 衆生者 今敬礼  
 釋迦牟尼如来  
 釋迦聲 碑文師 文珠師 利基薩  
 天中天 聖主 迎陵 我等  
 日滅くく分明か  
 奉新造御神領惣政所子生下総守綱房  
 綱房第二男年數十七  
 當御留主坐禪院昌膳阿闍梨  
 惣奉行 木屋奉行 黒川刑部 惣房朝  
 澁谷兵部少輔村瀨

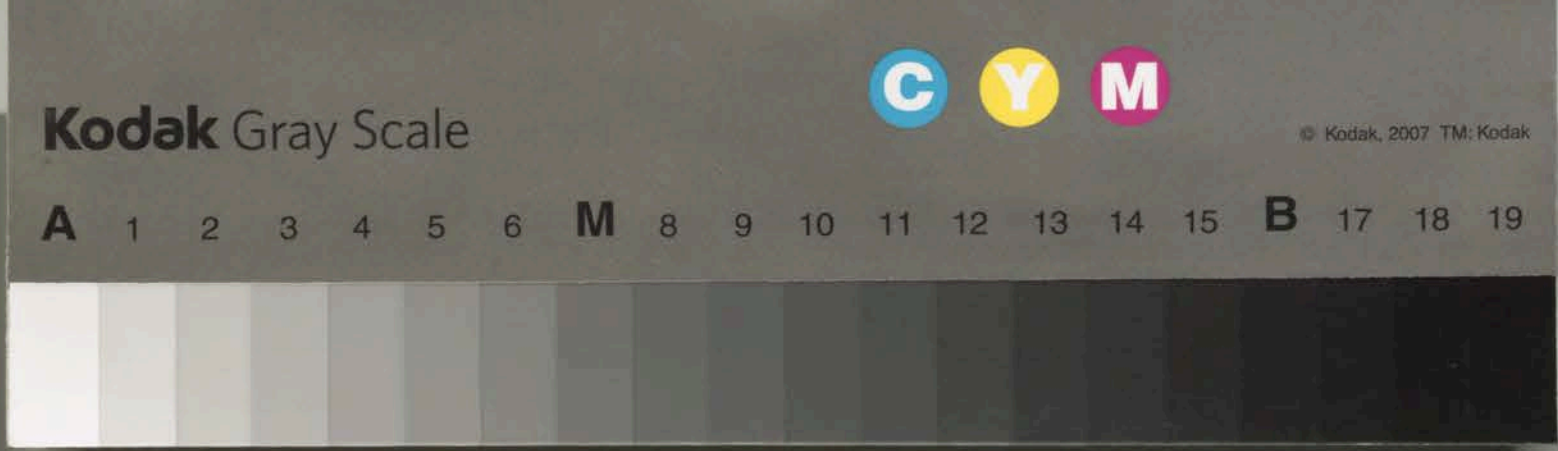
押原推移録中ノ巻

十五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





珠

皆川山城守息女 御上様  
神領惣政所壬生上総介 義雄 之

奉成就當社今宮御殿上普  
當御留守座禪院權大僧都昌傳  
當上人空藏院法印盛俊四代目

奉行衆

稻葉大和守信久  
豊田和泉守吉忠  
高橋維殿亮吉長

天正十五年丁亥  
同御殿上普棟札

石原文の儘を寫し末子分明なるまで

鍛冶次  
繪

天  
△谷  
+ 申 + 申 +  
+ 申 +  
+ 申 +

聖主 天中天  
迎陵 類迎聲  
物戒師 釋迦牟尼如來  
我等 哀愍 衆生者 今敬礼

大行車 帝釋天王  
今日戒師 弥勒菩薩  
碑文師 文殊師利菩薩  
證誠 大梵 天王  
諸行事 普賢菩薩  
諸行事 觀世音菩薩

卯月廿七日

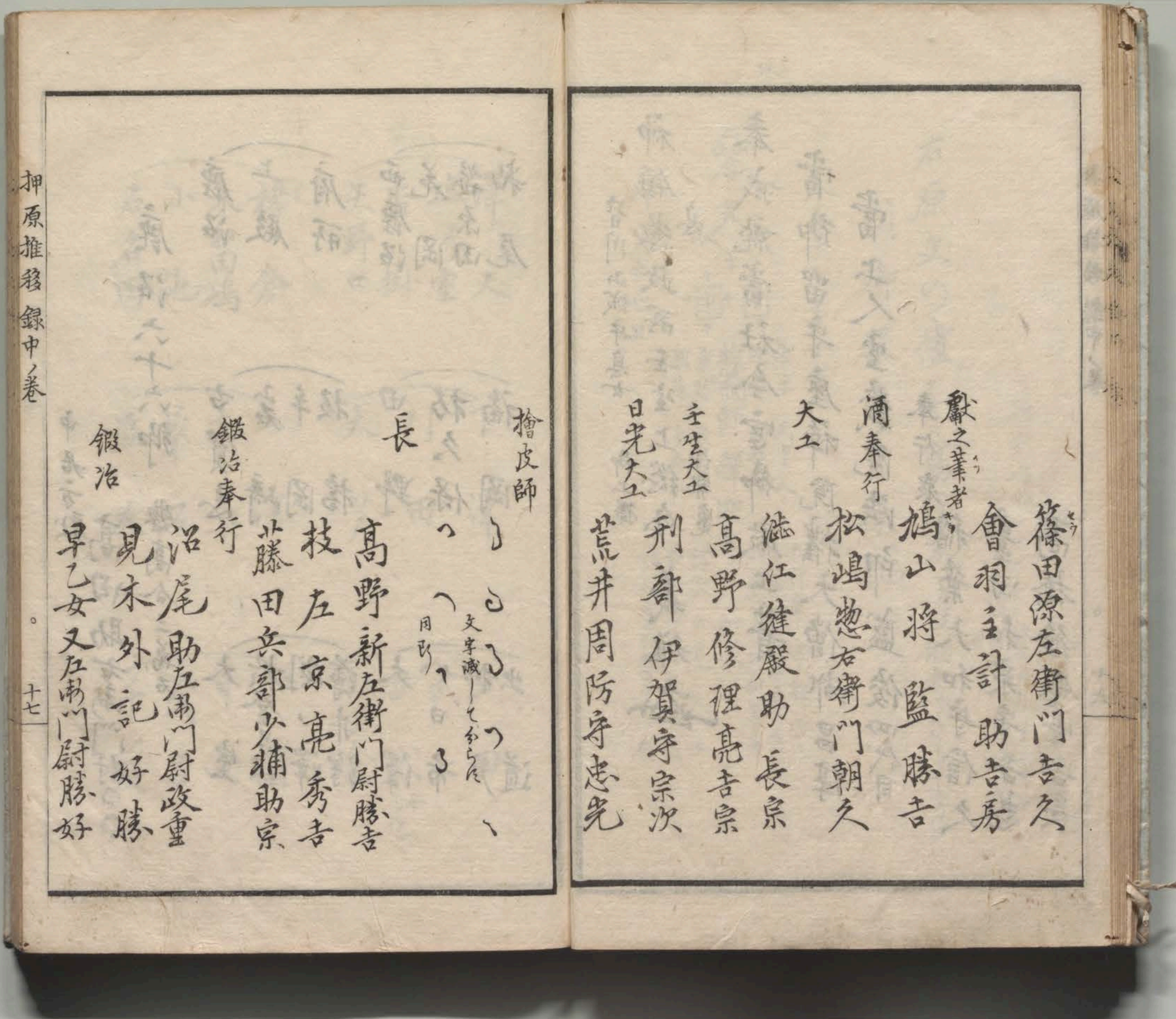
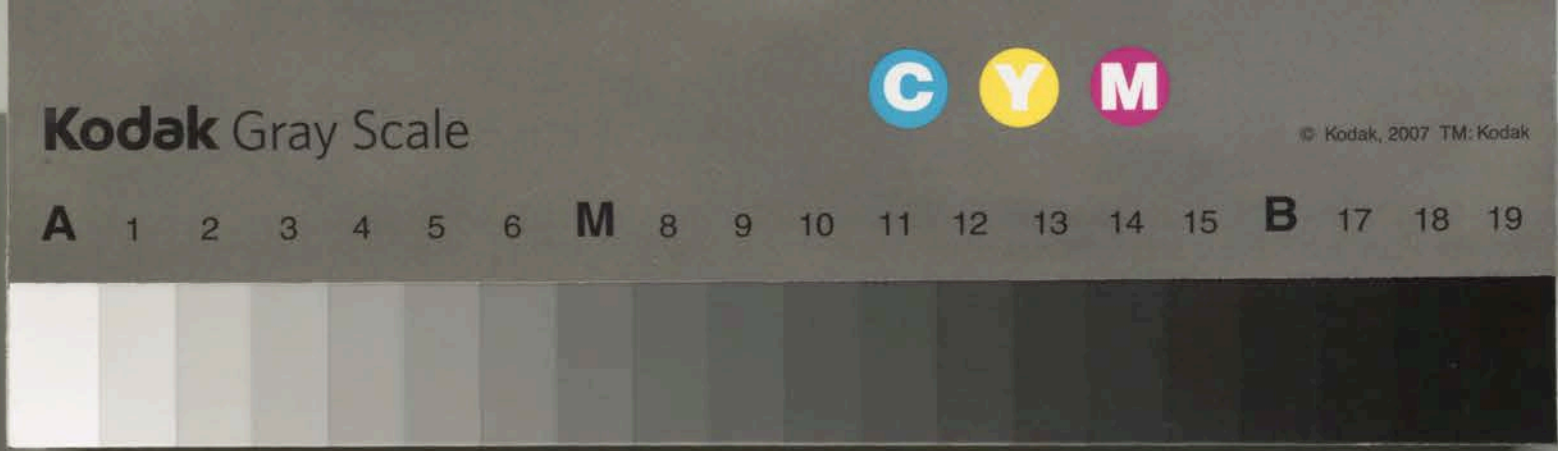
押原推移録中ノ巻

十六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





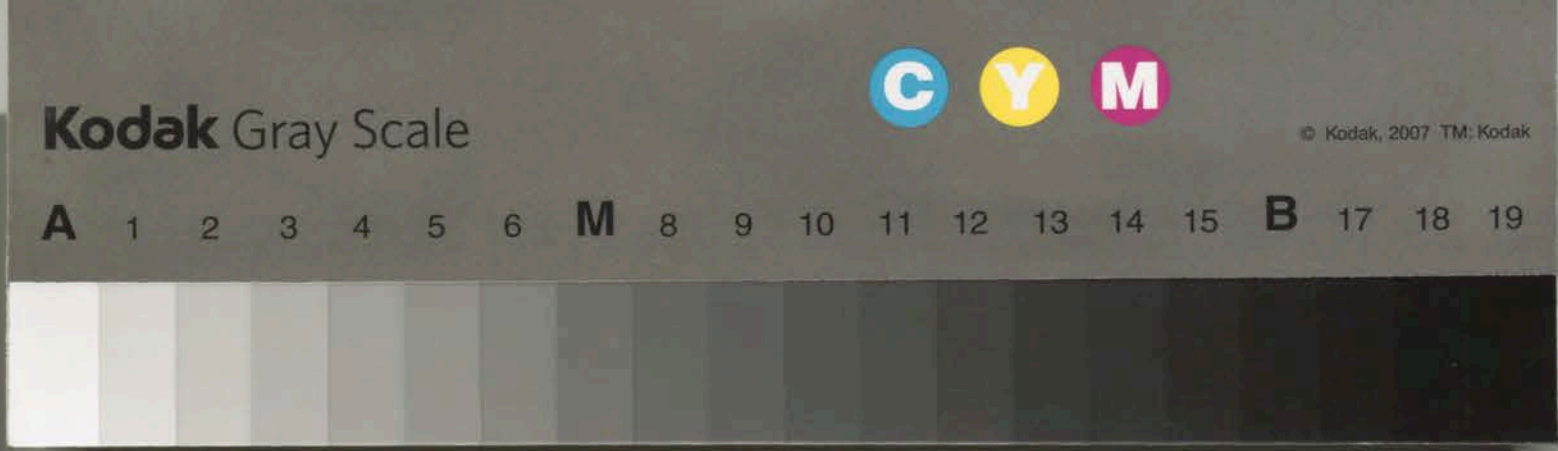
押原推移録中巻

鍛冶  
 鍛冶奉行  
 沼尾 助左衛門尉政重  
 見木 外記 好勝  
 早乙女 又左衛門尉勝好  
 長  
 高野 新左衛門尉勝吉  
 枝左 京亮秀吉  
 北藤 田兵部少補助宗  
 捨皮師  
 日光大工  
 壬生大工  
 大工  
 酒奉行  
 松嶋 惣右衛門朝久  
 徳江 健殿助 長宗  
 高野 修理亮吉宗  
 刑部 伊賀守宗次  
 荒井 周防守忠光

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





押原推移録中ノ巻

澤又 塩ノ室 沓掛 矢野口 楮倉 木和田嶋 小池 石名田

下澤 引田 大引 大土津 大桑 芥沼 盛友

玉田 武子 古代今作ル 小倉 加蘭 日向 日茂 千度

鹿沼 上殿 府所 西鹿沼 花岡 笹原田 粕尾

古賀志 岩崎 年岡 板橋 田野 福久保 福岡

大室 於登呂沢 関澤 薄井澤 大澤 八日布 柳戸 出道

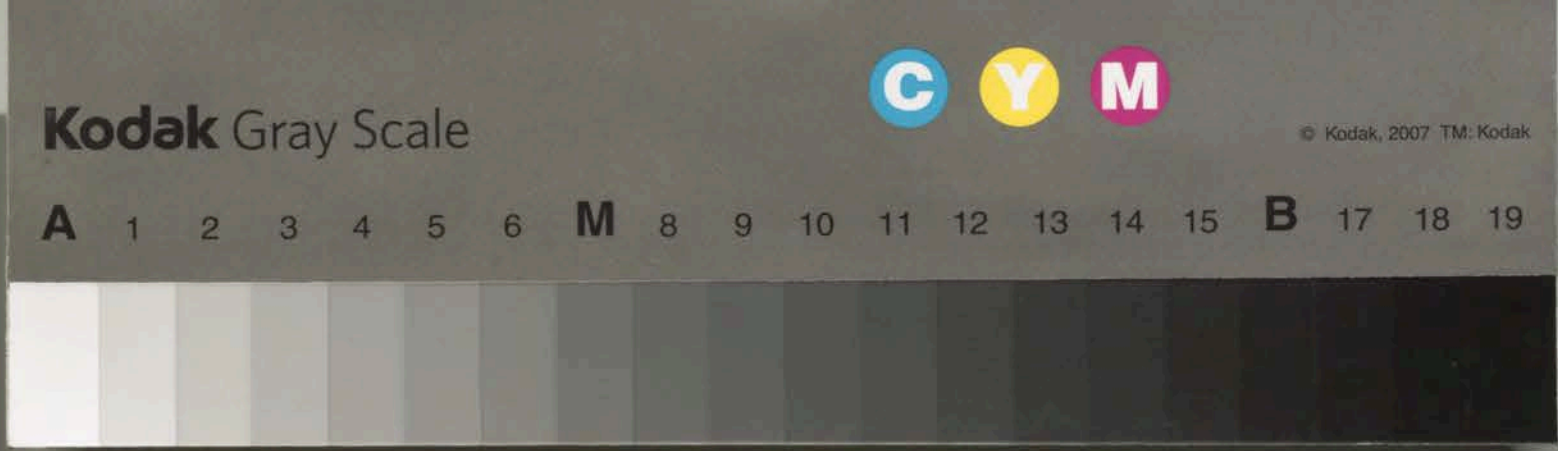
鹿沼六十六郷 惣高合三萬石

中居方獻 高田助方尉了

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





権現塚并當郷之辨  
 上にとつて六十六ヶ村の村々も権現  
 塚と号せり大なる塚今に残りてあり里  
 老の話云壬生家鹿沼に在城の時今宮大  
 権現を以て六十六郷の惣鎮守と爲故に  
 村々も小社を營て尊崇せり古徳  
 是之村毎に點を加へて組を附て當  
 郷の標之當郷といつて往古氏子の村々  
 を組て一ヶ年替り今今宮神事を始め

右者家藏寛永年中留書之内  
 空明長板 瀨神烟荷  
 深岩 以上  
 小富 林  
 山片根 飯  
 倉口 山室  
 大渡 水  
 見野 文狭  
 栗下南摩  
 村井 櫻山  
 奈良部

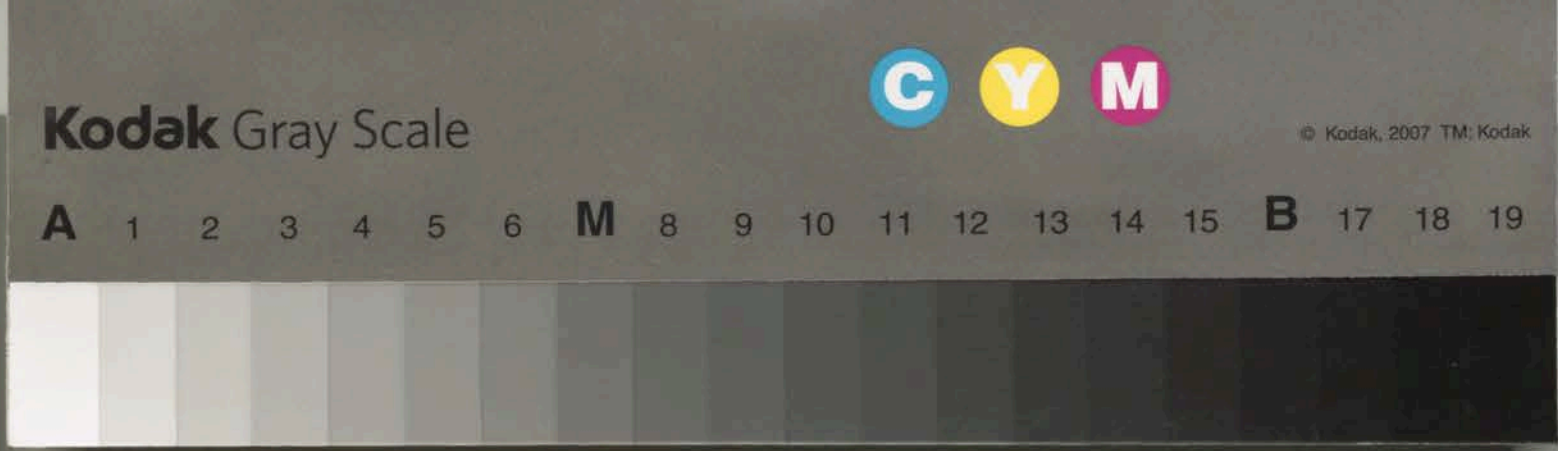
押原推移録中ノ卷

十九

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





惣了の社役に當<sup>アツ</sup>之其番に當<sup>アツ</sup>了村  
とせしめて之る名目之此當郷に當<sup>アツ</sup>了  
年子其村中佛<sup>アツ</sup>に掌<sup>アツ</sup>了事能<sup>アツ</sup>に死  
人阿<sup>アツ</sup>時ハ村に葬<sup>アツ</sup>事を禁<sup>アツ</sup>ん一他村  
に假<sup>アツ</sup>檀<sup>アツ</sup>那寺をたの<sup>アツ</sup>きて葬<sup>アツ</sup>事あり一  
今村に墳墓残<sup>アツ</sup>あり古老の口碑<sup>アツ</sup>に然<sup>アツ</sup>に此例<sup>アツ</sup>以<sup>アツ</sup>り廢<sup>アツ</sup>  
下今<sup>アツ</sup>當郷と<sup>アツ</sup>了名目と<sup>アツ</sup>だ<sup>アツ</sup>し知<sup>アツ</sup>り人  
り<sup>アツ</sup>又今宮の神<sup>アツ</sup>ハ六<sup>アツ</sup>十六郷の惣<sup>アツ</sup>録守<sup>アツ</sup>る  
由<sup>アツ</sup>を辨<sup>アツ</sup>了る者<sup>アツ</sup>之<sup>アツ</sup>をさ<sup>アツ</sup>くさ<sup>アツ</sup>き<sup>アツ</sup>歎<sup>アツ</sup>り<sup>アツ</sup>き

事<sup>アツ</sup>ハ<sup>アツ</sup>以<sup>アツ</sup>や是<sup>アツ</sup>に依<sup>アツ</sup>り本<sup>アツ</sup>の<sup>アツ</sup>ま<sup>アツ</sup>今<sup>アツ</sup>爰<sup>アツ</sup>に今  
宮<sup>アツ</sup>記録<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>詮<sup>アツ</sup>鑿<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>りて<sup>アツ</sup>六<sup>アツ</sup>十六<sup>アツ</sup>ヶ村<sup>アツ</sup>當郷  
の<sup>アツ</sup>社<sup>アツ</sup>役<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>除<sup>アツ</sup>了る由<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>り<sup>アツ</sup>の<sup>アツ</sup>願<sup>アツ</sup>書<sup>アツ</sup>の<sup>アツ</sup>赴<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>  
詳<sup>アツ</sup>記<sup>アツ</sup>は<sup>アツ</sup>是<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>見<sup>アツ</sup>り<sup>アツ</sup>往<sup>アツ</sup>昔<sup>アツ</sup>當郷<sup>アツ</sup>に<sup>アツ</sup>今宮<sup>アツ</sup>の  
社<sup>アツ</sup>役<sup>アツ</sup>あり<sup>アツ</sup>一<sup>アツ</sup>事<sup>アツ</sup>の<sup>アツ</sup>廢<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>り<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>知<sup>アツ</sup>り<sup>アツ</sup>又  
今宮<sup>アツ</sup>の<sup>アツ</sup>神<sup>アツ</sup>北<sup>アツ</sup>神<sup>アツ</sup>威<sup>アツ</sup>驗<sup>アツ</sup>あり<sup>アツ</sup>一<sup>アツ</sup>事<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>知<sup>アツ</sup>  
了<sup>アツ</sup>一<sup>アツ</sup>

乍<sup>アツ</sup>忌<sup>アツ</sup>書<sup>アツ</sup>附<sup>アツ</sup>を<sup>アツ</sup>以<sup>アツ</sup>奉<sup>アツ</sup>願<sup>アツ</sup>作<sup>アツ</sup>事<sup>アツ</sup>

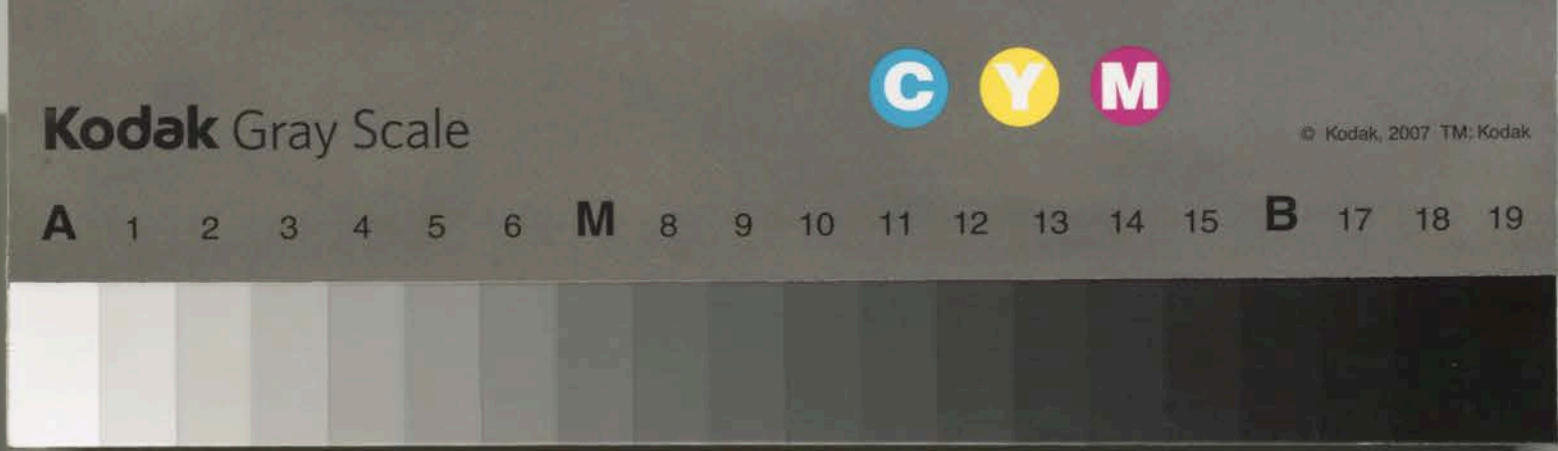
一<sup>アツ</sup>野<sup>アツ</sup>州<sup>アツ</sup>都<sup>アツ</sup>賀<sup>アツ</sup>郡<sup>アツ</sup>鹿<sup>アツ</sup>沼<sup>アツ</sup>町<sup>アツ</sup>惣<sup>アツ</sup>録<sup>アツ</sup>守<sup>アツ</sup>今<sup>アツ</sup>宮<sup>アツ</sup>權

押原推移録中ノ卷  
二十一

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





現者近村六十ヶ村結守之毎毎年六月廿  
 日九月九日兩度神事右六十ヶ村  
 組合當番相當り依組合村令所供米  
 指出し毎年兩度之神事亦勤事以是  
 右當番相當り依村令死人其度之節  
 當番之當り依村令地之内之老死人葬り  
 依依先年之不足來他村之地之志心仕  
 死人之葬來り以之處近年右六十ヶ  
 村之内余程度之神事御供米不指  
 出神事相勤事依此段様子を承り  
 以處之神事當番亦當り御供米差出  
 之付死人を他村之地之葬り依間神事  
 當番相除様之羅成り中以上之様  
 來り以之老神事祭禮之断絶傳事  
 下忍事存依身此段奉願上以卒神  
 事當番相當り以村令死人其度之節他  
 村令葬り以中當番村之内之死人葬り  
 以様之御不所免之御書附頂戴

押原推移録中卷

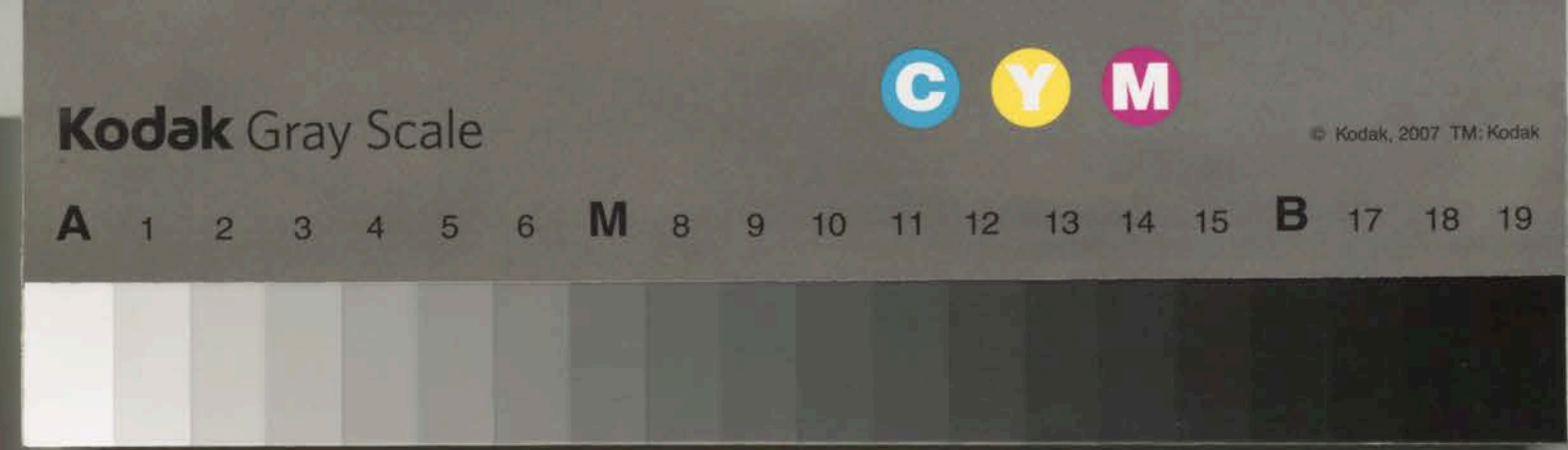
廿一

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2







仕度奉願上作左少々毎年兩度之神事  
 祭禮等茂末共相續仕半奉存  
 右之通乍思宜所披露奉願上作委  
 細之儀之口上ヲ以可申上以上

元文五申年  
 四月七日

野州都賀郡唐沼町  
 今宮權現祠官  
 柿沼大和  
 福田駿河  
 氏子惣代  
 大谷瀨兵衛

山口四郎右衛門  
 御本所様  
 御役人中換

右之通取差出山處從 御本所様  
 御免許之 御倫旨頂戴仕今今宮神社  
 内陣之納ノ置儀

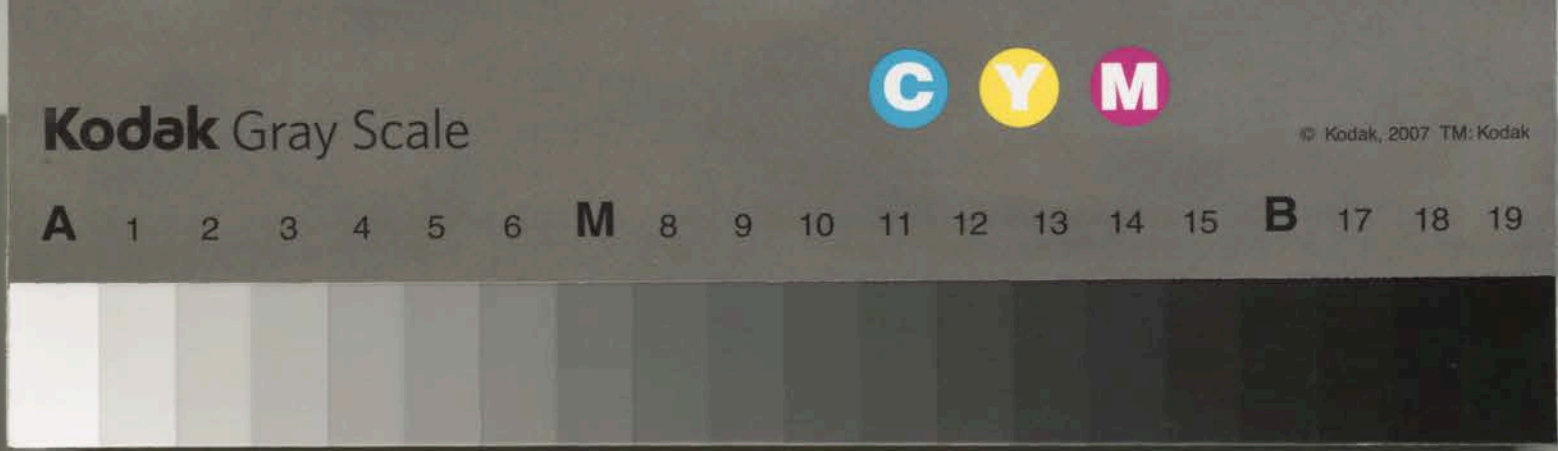
六十六郷異説辨  
 廊城一覽云六十六郷之六

押原推移録中卷  
 廿三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





西鹿沼 上殿 府所 田野  
 朽久保 福岡 玉田 古今小代代  
 小倉 室瀬 明神 長畑  
 板荷 深岩 富岡 小林  
 古今賀加志 岩崎 手岡 板橋  
 大澤 八日市 柳戸 出今道  
 猪倉 黄今和田嶋 小池 山口  
 片倉 根室 飯山 大渡  
 水今奈之 十今六 大室 松今登呂今沢

関野沢 今薄井沢 宇壽伊沢 今土沢 土佐和 大栗  
 芥沼 森友 見野 文今獲  
 下南摩 栗野 村井 柳山  
 奈良部 花園 菅原田 稻尾  
 下澤 引田 大芦 加蘭  
 日向 茂呂 千度

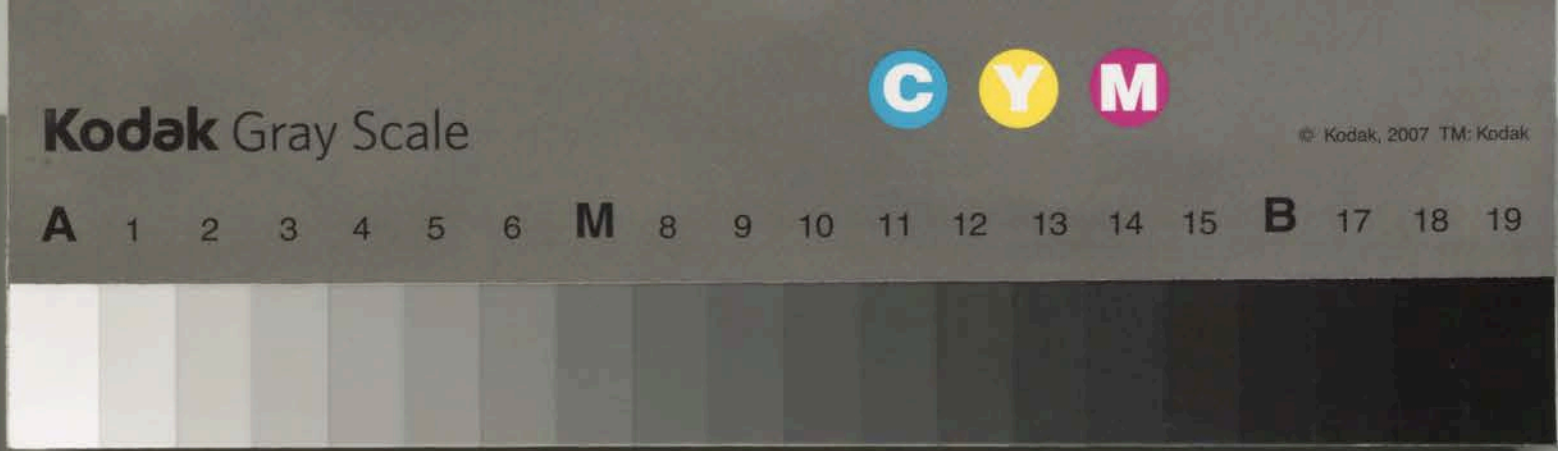
以上五十九名上下と分る村を合せて六十六之  
 或説今宮造營の人数を出る村数  
 あると云ふ

押原推移録中ノ卷  
 廿三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





又一書、澤又塩室 沓掛 矢野口  
 武子 石那田 鹿沼を加へて西鹿沼あり  
 是を六十六郷といひけり是ありを知ら  
 云し

按て此説けりも穩たふは古頼朝六十  
 六郷を以て日光山に寄附せしきしに  
 鹿沼を以て料といひ是六十六郷名目の  
 始之きし六鹿沼を除くハ據りし又  
 郷名五十九村上下と合するを以て六十六と  
 せしと公ありけりハ予家藏の苗書の方  
 正しとすし

辛地明鑑

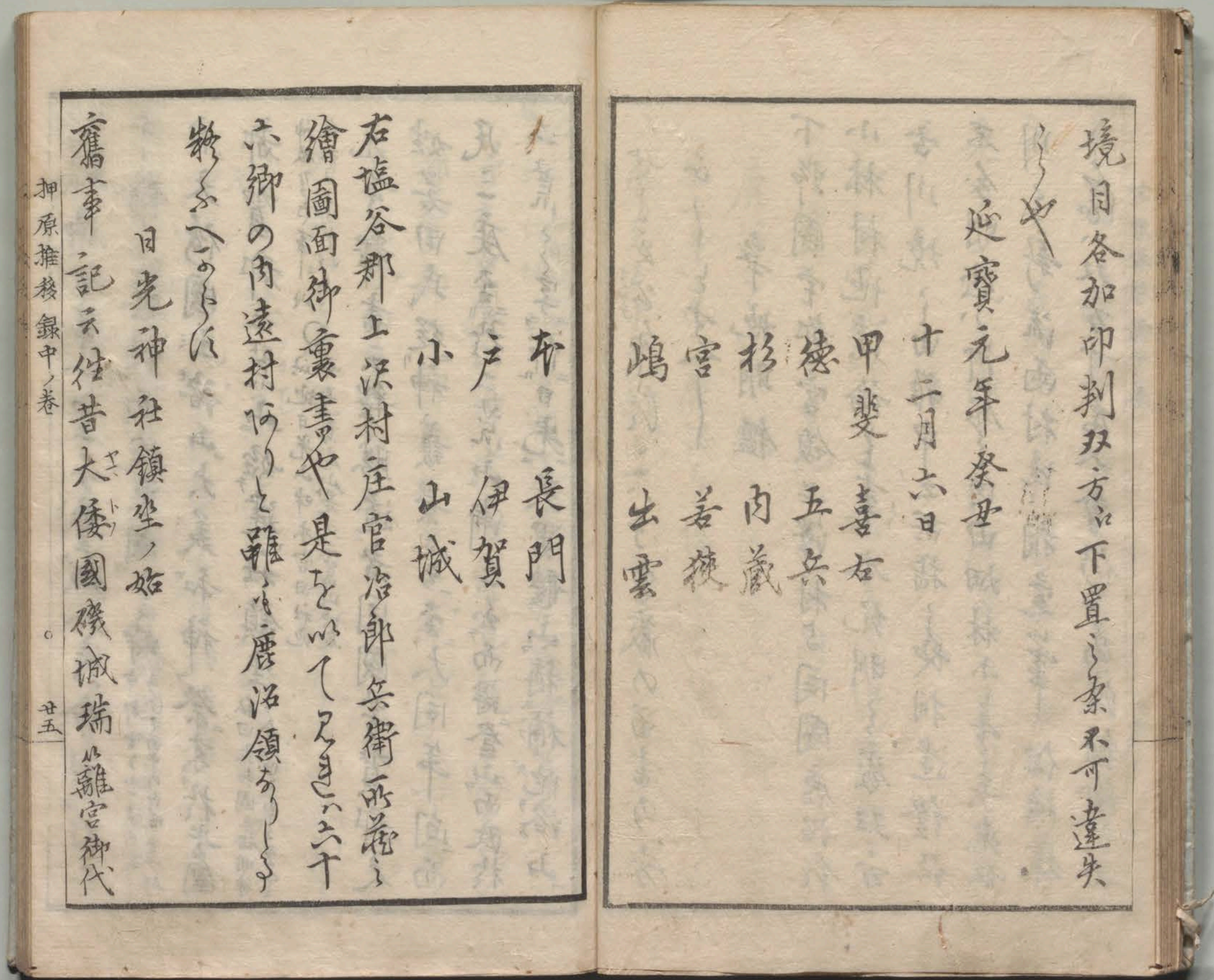
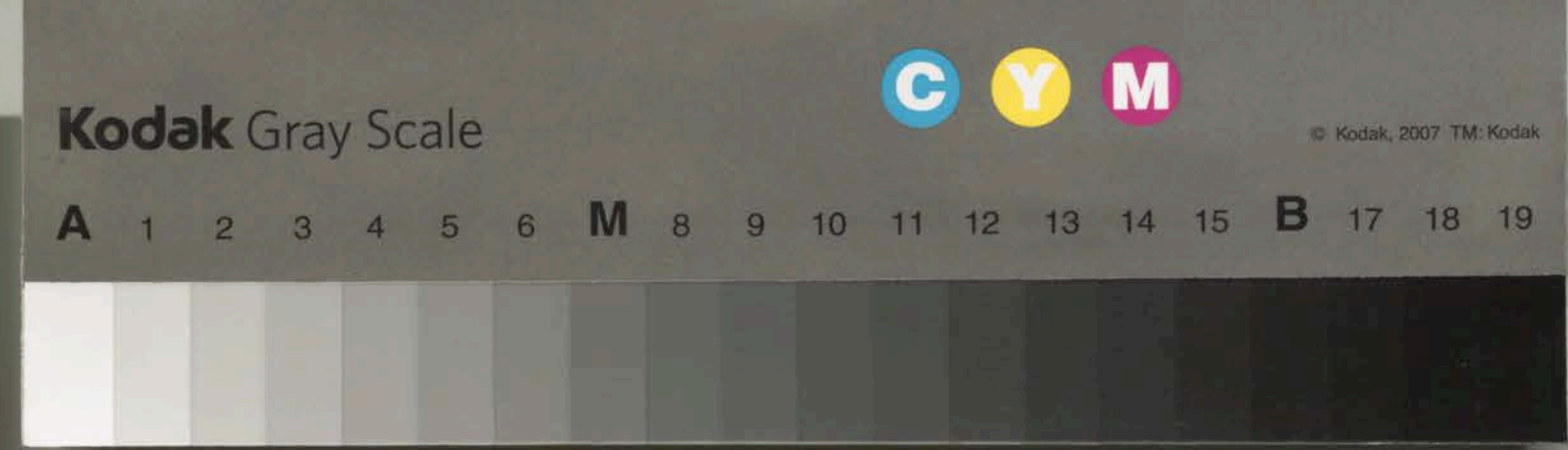
下野國宇都宮領上澤村と同國鹿沼領  
 小林村地境論之事令死明之處双方  
 古川境より由難申之所指り地相違證跡  
 不分明然ハ河原より内田畑林より六鬼奴  
 川より新流西村境相定筆一但漁獵  
 之儀ハ双方可為入會仍亦為後鑑繪圖面

押原推移録中巻  
 廿四

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2

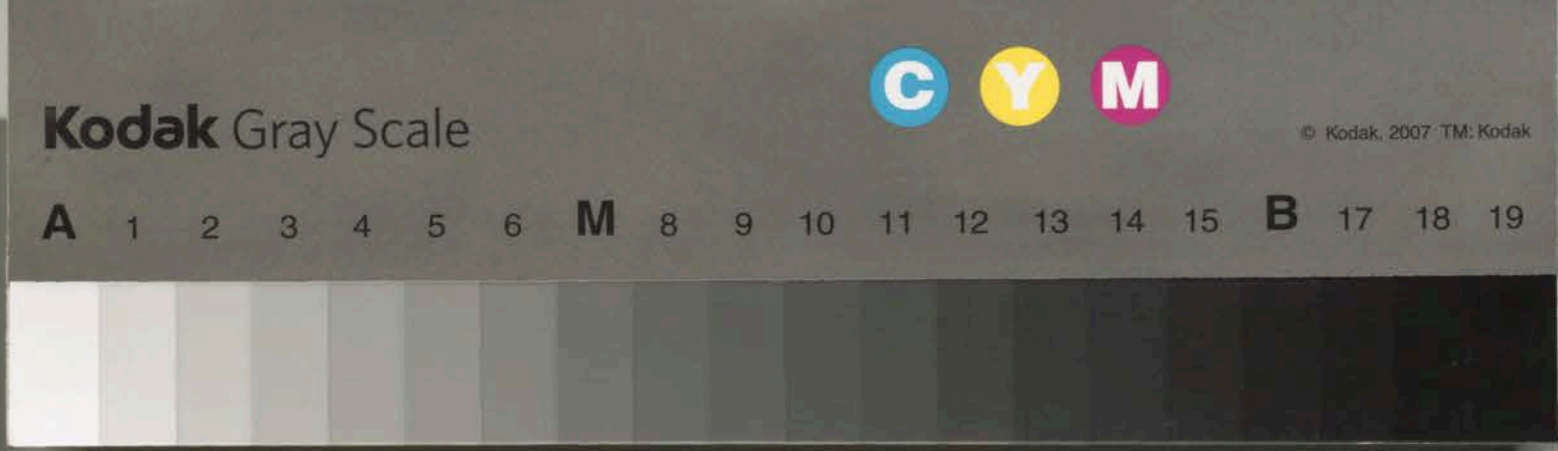




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





人王十代 御世第一白王子豐城入彦命討於三  
蓋崇神 千餘之惡徒而治東國之時宇都宮子宮造りあり  
多じて甲子の内西といふ  
 自大倭國三諸山大美和神祭末於崇國  
 都賀郡二荒山始建社鎮坐私曰大和國三輪郡神  
神原力と事一此 〇此地日光山呼本宮旧社地  
縁故よりといふ 也其荒尾山是又二荒山地名  
 元亨釋書云釋勝道者同國芳賀郡之  
 姓若田氏從神護景雲至大同年間而  
 凡二度至於二荒山漸三至而得登山而改於  
 二荒之字作日光矣男體山稱補陀洛山

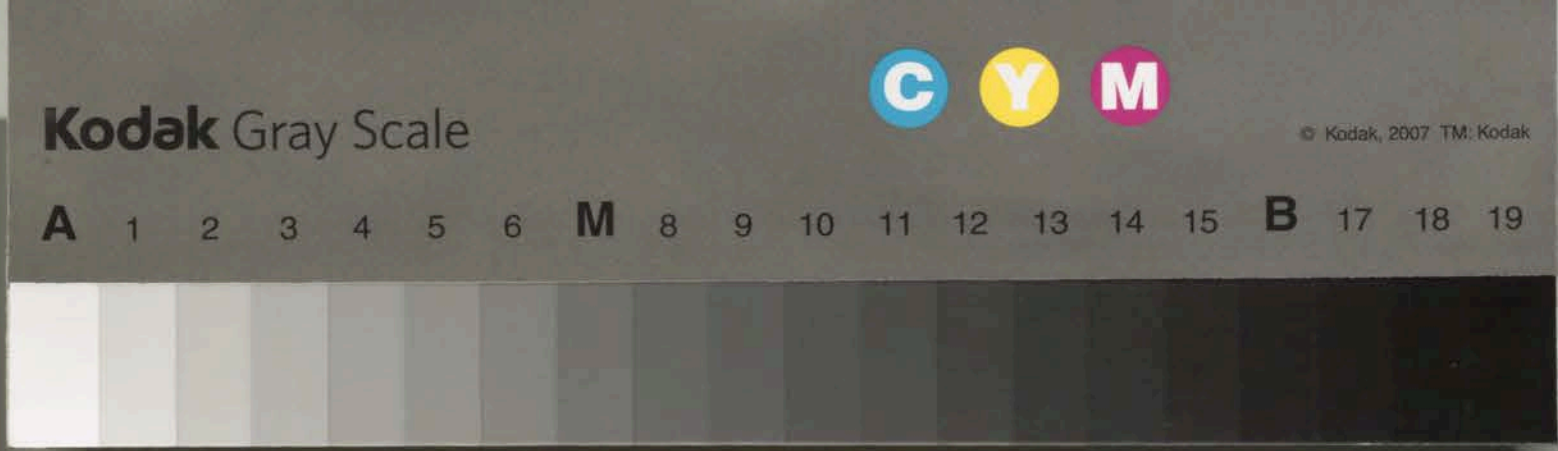
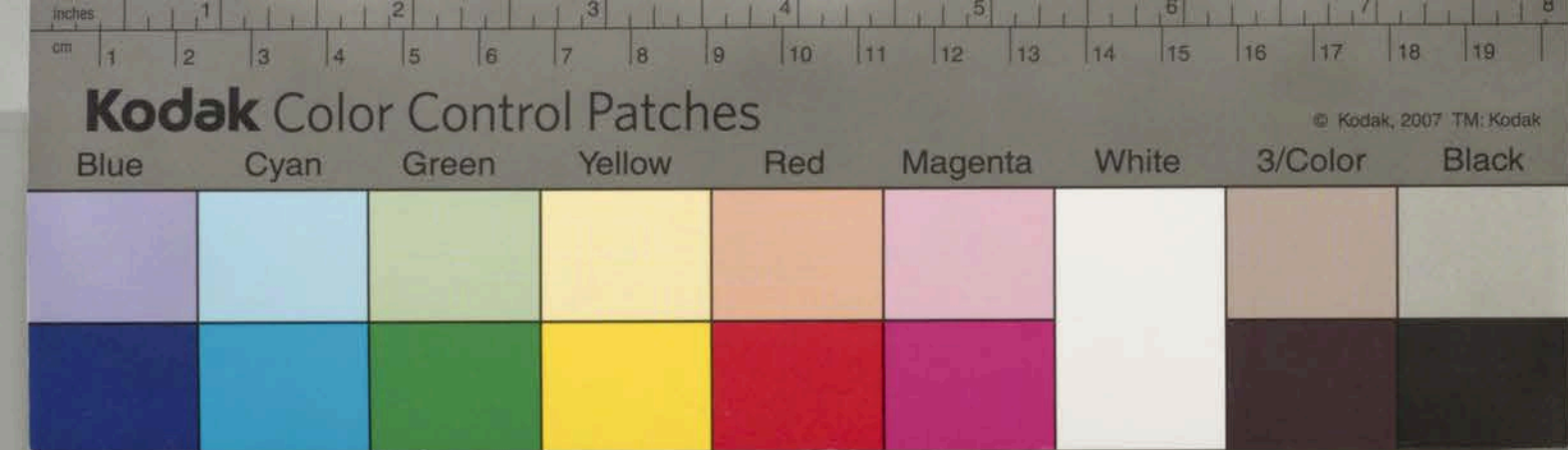
二荒山 予友石裂山神官湯澤真龍云和名抄  
 都賀郡の郷名地名に布多といふあり  
 是則今の日光なるを古ハ日光山を布多  
 の荒山と号せしを文字よりして二荒と  
 記りて又其二荒を二カウと音より訓二カウを  
 記りて日光の文字をより作り若くは下  
 〇按子勝道山を開初る神護景雲ハ  
 四十八代稱徳天皇の御世也元年上宮

押原推移録中ノ卷  
廿六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





今至文政九年丙戌年數千三百十也  
 鳥井跡の考今坊子作  
 按に三代實錄云貞觀元年正月廿七日甲申  
 下野國從三位勳四等二荒神授正三位  
 同二年九月十九日丙寅詔下野國正三位  
 勳四等二荒神社始置神主  
 同七年十二月廿一日戊辰授下野國正三位勳  
 四等二荒神從二位  
 同十一年二月廿八日丙辰進下野國從二位勳  
 四等二荒神階加正二位  
 蓋令義解位田の法を以て正一位小因  
 八十町とあり十六代清和天皇の御代  
 位階進せし事知し一後  
 遙に沙世を經て右幕下頼朝宿影の  
 事ありし六十六ヶ村を寄附せし  
 極官の定まらば給ひけん斯く我押原  
 鹿沼宿ハ神領の入り口ありはとて遠鳥井

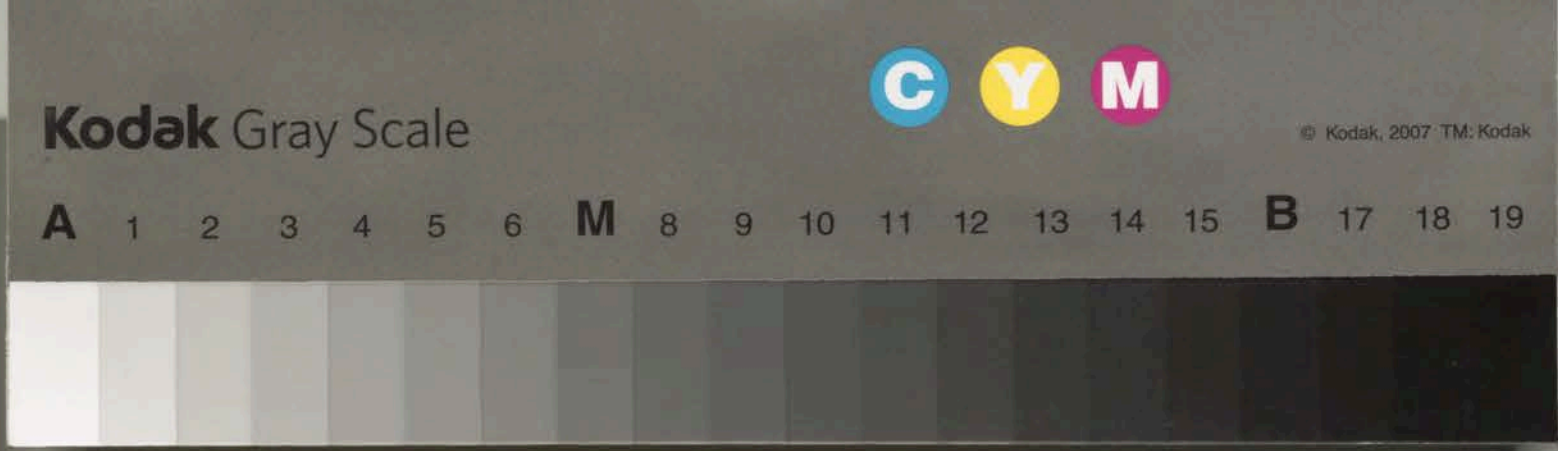
押原推移録中ノ卷

廿七

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





を宿の入り口に建しありし一し今其跡乃  
地名を鳥井跡と号し  
上古中仙道の考并宇都宮明神鎮坐始  
又按之往古の中仙道ハ上野國より日光に掛  
り通れりしなりし一し古事記崇神天皇  
乃段に東の方より所遺建沼河別子父  
大毘古と共に奥州より父子往遇しより其所  
をさしして相津より會津と名号し  
とつる事あり今試に其道せ助を計り

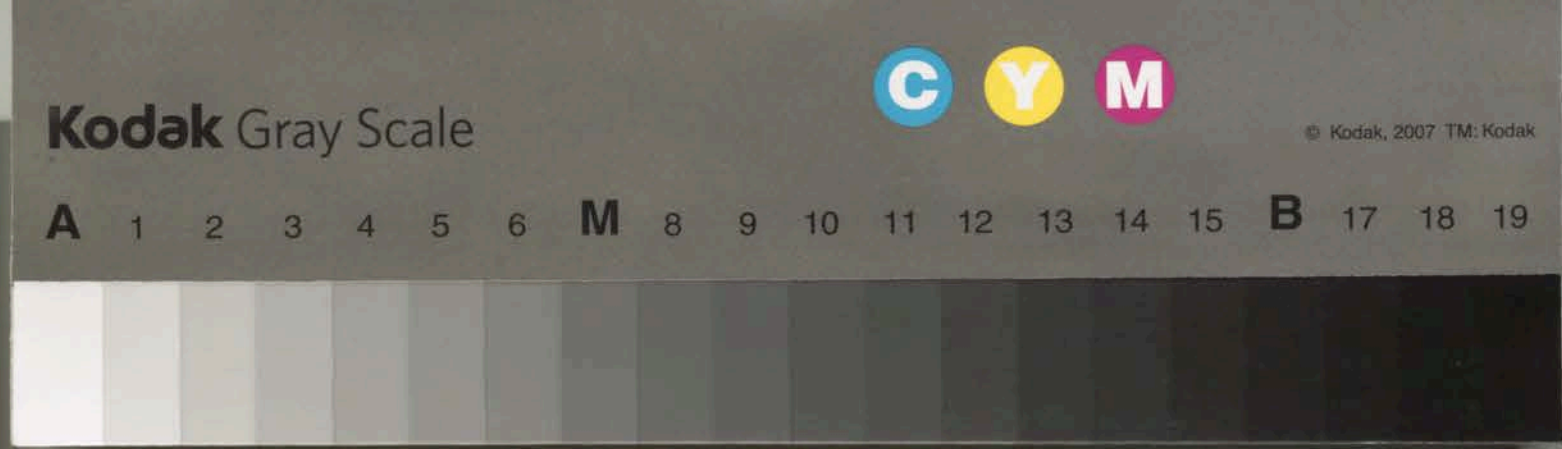
考ふに古考の話より上州花輪ハ上古の奥州街  
道といへば據るべき事ハ非ざるし一し京都  
より木曾路を経て上州大胡子掛り花輪  
沢ハ足尾古峯ヶ原の跡をこそるる大芦  
の内原山押越古越路打倉拓を通行して  
鉢岡子出峰をこそるる小栗川の内向原子出  
瀧河京通りより今日光向川京子通りより支  
り高原跡をこそるる會津奥州へ通行  
せしありし一し其故ハ今大芦村に一里塚

押原推移録中、卷  
廿八

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2





の臨處にあり又銚岡の内に里下りといふ  
 地名ありて一里塚の跡ありと我々今山中  
 成りて林木繁茂なり又小来川の内瀧川系と  
 いふ所も一里塚の跡ありと我々  
 又石裂より大芦塩沃一出る道何れ塩澤  
 小来大芦八丁畑一出て小来川一出る所あり  
 山窪より瀧川系一も出る之瀧川系則黒川  
 の流の源之水ある處の向大谷川あり思ふに  
 日光の神社中仙道より奥州一の合口を  
 以て日光よ鎮坐あり一其のあり一我々  
 又中仙道を宇都宮近く一移やせしむる  
 ところ二荒山の神社を遷坐あり奉  
 りて移し祭事するも何れ一宇都宮  
 奥州一の入りより程ある都會乃地ある  
 あり  
 ○宇都宮明神社記云稱徳天皇諱阿闍梨武帝  
之女四十八代之  
 御世神護景雲元年奉移座河内郡  
 國府小寺山之地矣今の下宮地也然因舊奉稱二

押原推移録中ノ卷

廿九

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-2

